+R 未来を生みだす人になる。
立命館大学
RITSUMEIKAN

立命館

父母教育後援会だより

A Magazine for Parents' Association Members of Ritsumeikan University

2010年度
冬号
2010 Winter Issue

CONTENTS

02-13 [特集] 逆境に負けない「立命館の学生力」を育てる2

04 学生のホンネ
10 親の心配、子どものホンネ
12 立命館大学校友インタビュー
澤村 諭 氏（ローム株式会社 代表取締役社長）

14-37 秋のオープンカレッジ・アカデミック京都ウオッチング

15 進路・就職講演会
17 学生生活講演会
19 アカデミック講演会
21 学部別懇談会
33 Parents' Voices / 委員懇談会
34 アカデミック京都ウオッチング

38-43 学生生活

38 立命館のゼミナール訪問
42 施設紹介 ―キャリアオフィス―

44-47 報告・お知らせ

44 保健センター健康通信
46 学生のスポーツ＆イベント
47 学園トピックス

父母教育後援会ホームページはこちら → http://www.ritsumei.ac.jp/mng/fubo/index.htm（立命館大学のHPからは、「保護者の皆さまへ」▸「立命館大学父母教育後援会」をクリック！）

特集

逆境に負けない「立命館の学生力」を育てる2

希望の進路をつかみ取るための「学生力」は、一朝一夕に培われるものではありません。
将来をしっかり見すえ、「どう働くか」「どう生きるか」を真剣に自分に問うことから、それは始まります。
正課での学び、さらに課外活動を通じて「力量」と「世界観」「社会観」を育みながら、
「将来のビジョン」を編み上げていく。
学生生活の充実の先に、希望の進路の実現が見えてきます。

正課の学び

社会に通用する「力量」を4年間の学部の学びで着実に育む

将来社会で大きく飛躍するためには、確かな学力形成によって築かれた「知の基盤」が不可欠です。それを育むため、立命館大学では学生の主体的な学びを育成する「学習者中心の教育」を実践しています。各学部で教学目標を設定して初年次に学力基盤を形成し、さらに学士教育課程で専門的な学びを獲得。卒業までに「確かな学力」を身につける教育を展開しています。段階的に学ぶことで、卒業までに幅広い知識と教養とともに、論理的思考力や問題解決力、その他異文化理解力や創造力といった社会で求められる多様な「力量」を培うことができます。

課外の学び

多様な経験から問題意識や関心を見つけ将来のビジョンを明確にする

正課の学びはもちろん、キャンパスだけに留まらない多様な人との出会いや経験が、社会で求められる総合的な「学生力」を育みます。そのため立命館大学では、海外留学や社会と連携したプログラム、課外自主活動など、多彩なプログラムを提供し、課外での学びを後押ししています。けれど「留学した」などといった「事実」だけでは十分ではありません。採用試験、そして社会で問われるのは、働く上での目標やそれを実現できる能力です。プログラムに取り組む上でも、経験を通して問題意識や価値観を形成し、それを将来のビジョンにまで高めていくことが重要なのです。たとえば留学先で荒れ果てた農場を目にして、人々の暮らしを豊かにする手助けをしたいとの思いが膨らみ、世界の国々の発展を支援する活動に携わる道を志した学生もいます。こうして自分自身の「気づき」を総合し、「自分のビジョン」を形成して初めて挑戦した活動が実を結んだといえます。

キャリア支援

進路実現のための準備と実現を支えるキャリアオフィス

大学生活を通して育んできた力量や価値観を、卒業後の進路実現に結びつけられるよう力強く後押しするのが、キャリアオフィスです。学生同士の学び合いによって自己を理解したり、手本となるような社会人との出会いから職業理解を深めたりと、さまざまな企画を催しています。また企業を大学に招へいし、企業と学生との「出会い」の機会を設け、マッチングを図るなど、多彩な支援プログラムを展開しています。

正課と課外の
二つの土台となる力の上に
学生ひとり一人の希望する
進路・就職の道を造っていく。

大学生活がスタート！
授業や課外活動を頑張るぞ！

授業も大変だけど、
興味のあることに
挑戦してみよう！

学習と経験をとおして、
自分のやりたいことが見えてきた！
キャリアオフィスに行ってみよう！

希望の進路実現！
社会に出ても
学び続けるぞ！

キャリア教育（正課授業）

低回生からいかに生き、働くかを考える

「低回生からのキャリアデザイン」を重視し、1～3回生を対象とした単位認定型の「キャリア形成科目」を用意しています。1回生時には、科学的に自己を認識すること、2回生以降は、他者（個人、組織、社会）の科学的理解をテーマに設定。社会で活躍する方々を講師として招く講義など、テーマに沿ったさまざまな学びを通して人生の設計図を描き、職業意識を高めていきます。

多様な進路に合わせた就職支援

学生・卒業生のつながりを重視した支援を展開

- 各ゼミやサークルから選ばれた学生が考える自主企画
- 就職の決まった学生が、就活をこれから始める後輩をサポート
- 多様な業界で活躍する卒業生を招いての懇談会
- 窓口での相談
- U・Iターン就職を希望する学生のための地元企業との懇談会
- エンジニア・研究者として活躍する卒業生との懇談会、企業見学

キャリアデザイン支援

卒業生も対象に自分の将来を見極める

自分の将来を考えるためのキャリアデザインプログラムを用意しています。思い描くのは、「就職すること」ではなく、もっと先を見すえた「生きること」「働くこと」について。在校生だけでなく、就職後間もないOB・OGにも門戸を開き、異年齢・異業種間の交流を深める場も設けています。

キャリアデザイン支援

立命館の学生力

学生力を形成する土台

課外

教員養成プログラム
クラブ・サークル
留　学
エクステンション講座
ボランティア教育
インターンシップ

正課

基礎演習 → ゼミナール（学部により異なります） → 卒業論文・卒業研究

1回生 専門基礎と教養教育
2回生 専門基礎科目への展開
3回生 専門科目への発展
4回生 総合力の形成

学生のホンネ

学生は、大学生活のすべてを通して一歩ずつ成長しています。
とはいえどんなに頑張っている学生でも、みんな悩みや葛藤、時には大きな挫折を経験しています。
それらを乗り越えた学生たちに、「本当の気持ち」を語ってもらいました。

國島紗希さん
（スポーツ健康科学部1回生）

予想以上に学ぶ分野は幅広い。目標を決めるのはまだ先になりそう。

高校まではずっと、バスケットボール選手として自分がプレーする立場でした。将来は、プレーヤーとしてではなく、スポーツ記者のように、スポーツ選手の頑張りやスポーツのすばらしさを伝える人になりたいという思いから、新しくできた立命館大学のスポーツ健康科学部に進学しました。

入学して半年、大学生活は、嬉しい方に予想を裏切られました。一つには先生との距離がとても近いこと。「教授」というと、1回生の私たちでは話もできないようなイメージを持っていたけれど、どの先生も些細な質問にも親身になって答えてくださるし、研究室を訪ねても温かく迎えてくださいます。また学ぶ分野が多岐にわたることにも驚きました。授業では、マネジメントや健康、栄養、教育などさまざまな側面からスポーツを考えるんです。最初はスポーツに関係あることばかりに目が向いていたけれど、学ぶうちに教育や健康など、他の分野もおもしろいなと思うようになってきました。

課外活動では「立命スポーツ編集局」という大学の体育会機関紙を発行する団体に所属。アメリカンフットボールや駅伝、野球などの大会や選手の活躍を取材し、記事にまとめる活動をしています。その他にも学部で開催されるゼミナール大会に出場したり、スポーツに関わるイベントを企画したり。いろいろなことに挑戦し過ぎて、時間がないのが悩みの種です。「課題の提出時間まであと2時間しかない！」なんて冷や汗をかきながらパソコンに向かっていることもあります。おもしろいことがありすぎて、将来の目標は様々な方向に広がる一方です。これからゆっくり探していきたいと考えています。

学生オフィス→P8 01

星野廣之さん
（文学部3回生）

就職活動を前に迷ったけれど教師への夢一本に絞ると決めた。

教師に憧れを持ったのは、中学生の頃。野球部のキャプテンだった私は、後輩の指導も任され、「教えることのおもしろさ」を実感。また中学、高校の野球部の顧問の先生、社会の先生など尊敬できる恩師と出会ったことで、教師への思いはいっそう強いものになりました。

立命館大学に進学後は1回生から教職課程を履修。中学の社会科、高校の地歴科・公民科教員を目指して勉強しています。教養・外国語・専門の授業に加えて教職課程を受講し、3回生になると放課後、教職支援センターで「教員採用試験対策講座」も受講しているので、大学を出る頃にはいつも真っ暗になっています。「国語」の免許取得も目指しているので、1番忙しかったのは3回生の前期。けれど同じく教師を目指す仲間がたくさんいるから、勉強を苦に思うことはありません。授業が終わった後、友達と一緒に夕食を食べ、他愛ない話をして息抜きするのが日課。おかげで楽しみながら勉強を続けられています。

迷うことがなかったわけではありません。周囲が就職活動を始めると、「教職は狭き門。一般就職の道も考えた方がいいんだろうか」と悩んだこともありました。でもここで諦めたり、中途半端に目移りしたら、きっと後悔する。そう思って迷いを振り切り、教職一本に絞ることを決めました。現在は、勉強以外にも、地域の小学生を支援するボランティアサークルでの活動や、高校でのインターンシップ、塾講師のアルバイトなどを通して、子どもと接したり、勉強を教える経験も重ねています。

教職教育課・教職支援センター→P8 02

中倉綾乃さん
（産業社会学部2回生）

福祉を目指す気持ちが折れかけていた時資格取得講座を受け、視野が広がった。

将来は人の役に立つ仕事をしたい。そう思い始めた中学時代、学校の授業で介護や福祉にかかわる仕事を知り、「福祉を勉強したい」と思うようになりました。社会福祉士を目指せる立命館大学産業社会学部の人間福祉専攻を選択。けれど思い描いていた理想と、現実はずいぶん違うものでした。社会福祉について学べば学ぶほど、「やりがいはあるけれど、とても難しい仕事。この道を進んで本当にいいんだろうか」と不安が募って…。正直に言うと、福祉を志す気持ちはほとんど折れかけていたんです。

変化が訪れたのは、2回生になってから。福祉に関わる資格を取得しようと、エクステンションセンターで「福祉住環境コーディネーター検定講座」を受講。講義を通して、介護や福祉の専門家になるだけでなく、たとえば住まいや生活の環境を整えるなど、さまざまな角度から人を支える道があることを学びました。一方、大学では1回生の学びや生活をサポートするエンター活動や、障がいを持つ児童の学童保育のボランティアに取り組みました。人とのつながりの輪が広がったこと、何より視野が一気に開けたことで、「もっと多様な視点で社会福祉をとらえ、自分に合った道を見つけよう」と思えるようになりました。資格を取得することで、より幅広い業界や職種で、福祉の視点や知識を生かせるのではないかと期待を膨らませています。

身近なところで支えてくれるのが両親です。大学であったことや悩みを聞いてくれるだけで安心できるから不思議。「もっと前向きに」など、私のことをよく理解してくれた上でのアドバイスに助けられることも多いですね。

エクステンションセンター→P9 03

山口耕平さん
（経済学部4回生）

何度も落ち込んだ中国留学くじけず努力したことが糧になった。

経済についてだけでなく、英語にも興味があり、その両方をしっかり学べると知って、国際経済学科の英語コースに進学しました。けれど実は高校時代から英語は苦手科目。でも苦手なことほど負けずに挑戦したくなるんです。英語コースでは、英語だけで進められる授業も多いので、最初はついていくのにも必死でした。2回生の夏に受験したTOEFLで目標のスコアを達成。これに自信を得て、念願だった香港大学への留学を決めました。成長著しい中国、中でも金融都市といわれる香港で経済を学べる。そう意気込んでいたものの、想像以上に大きな試練が待っていました。

まず直面したのは、自分の英語力の未熟さ。ネイティブのスピードで、専門用語の多い大学の講義は、聞きとることもままなりません。その上ディスカッションも多く、思うように意見を言えずに歯がゆさが募りました。初めての課題提出では、教授から「こんなひどいレポートを見たことが無い」と厳しい言葉を浴びせられたことも。宿舎で一人、幾度も落ち込みました。けれどここでくじけたら、悔しい。笑われても構わず他国からの留学生に英語で話しかけ、わからないところを先生に質問し、自分から積極的に働きかけたことで変わりました。1年間の留学を終えて帰国する時、厳しかったあの教授から、「君の進歩には目を見張った。感心したよ」と言われた時は嬉しかったですね。

帰国後、短い就職活動期間で希望に合った企業に内定を決められたのも、留学経験の賜物だと思います。辛いこと、できないことから逃げず、努力すれば、必ず成長できる。これからもその気持ちを大切にしていくつもりです。

国際教育センター→P9 04

カバンの中身

健康運動指導士の資格取得を目指して勉強中なので、そのテキストの他、ゼミナール大会に向けて論文制作に必要な資料などがぎっしり。英語もしっかり勉強したいので、電子辞書は欠かせません。

カバンの中身

カラフルな色が好きなので、大きくてたっぷり入るこのリュックはお気に入りです。やっぱり教職関係のテキストが多いですね。高校時代の世界史の教科書は今も手放さず、何度も読み返しています。

カバンの中身

カバンの中には授業の資料となるプリントがたっぷりひとかかえ。その他スケジュールを書き込む手帳とiPodが必須アイテム。エクステンションセンターの講座がある日には、そのための教科書も入れています。

カバンの中身

写真は留学を終えて帰国する時、友達がお別れ会を開いてくれた時のもの。教科書の他には英語で書かれた書籍。英語力が衰えないよう原書を読むよう心がけています。またiPodは必ずカバンに入れています。

学生のホンネ

ボランティア

堀尾祥子さん
（政策科学部2回生）

気軽な気持ちで始めた活動がきっかけで他のことにも積極的に挑戦するようになった。

大学入学当初は、これといって目標やしたいことがあったわけではありませんでした。「何かしなければ」と焦りを覚え始めた6月頃、友達に誘われてボランティアセンターに足を運んだことがきっかけで、ボランティアコーディネーターという学生の活動を知りました。始めたのは、「おもしろそう」という軽い気持ちから。現在は、センターを訪れた学生にさまざまなボランティア活動や団体を紹介したり、多くの学生にボランティアについて知ってもらうべく情報発信や啓発活動をしています。さまざまな企画も催します。今年は「興味はあるけれど、何をしたらいいのかわからない」という学生のために、ボランティアの1日体験プログラムを企画、実施しました。

活動では、初対面の人と話したり、たくさんの人の前で説明する機会がたくさんあります。もともと人前で話すことが苦手だった私。最初は緊張のあまり、頭が真っ白になることもしばしばでした。失敗もたくさんするけれど、先輩や友達に刺激を受けたり、助けられたりする中で、少しずつ苦手を克服しつつあります。また私自身も障がいのある人をサポートするボランティアに関わり、人の役に立つ喜びとやりがいを感じています。こうした経験を経て、他のことにも積極的にチャレンジしようという気持ちが強くなりました。不得意だった英語とパソコンのスキルアップにも注力。“Excel検定"の受験を目指す一方、来年にはアメリカへの短期留学を予定しています。何かを始めてみるという小さな一歩が、いつしか活動の幅を広げ、自分を成長させることにつながっていく。それを今、実感しています。

サービスラーニングセンター（ボランティアセンター）→P8 05

インターンシップ

松野力樹さん
（法学部3回生）

インターンシップを経験し漠然としていた将来像が明確になった。

将来の進路については大学に入学した当初から漠然と考え始めていました。早い段階から心の準備を始めたことで、大学での学びへの取り組み方も変わりました。3回生になって選んだゼミも、就職を見すえてのものでした。とはいえ自分にはどんな仕事が向いているのか、どんなことにやりがいを覚えるのか、大学生という立場では、よくわからないというのが正直な実感。会社の実態や仕事を知りたいという思いから、3回生の夏、2つの企業でインターンシップを経験しました。

ある食品メーカーでのインターンシップでは、社員の方の営業活動に同行し、顧客との商談を目の前で見る機会がありました。営業という仕事が思っていた以上に地道な努力の積み重ねを要することを知ると同時に、人と関わり、信頼関係を築くことが成果に結びつく仕事におもしろみを感じました。お客様と話をするチャンスもあり、人と話したり、関わることが好きだという気持ちに確信を深めることができました。一方、商社でのインターンシップでは、商社の仕事をロールプレイで体験。参加学生が数人のグループに分かれ、商品のデザインから仕入れ先との商談、発注、マーケティング、販売までをシミュレーションし、グループごとに営業利益を競い合うという実習に取り組みました。商社のビジネスを追体験し、ビジネスの醍醐味の一端を味わうことができました。インターンシップを通して得たのは、仕事や将来像に対する小さな手ごたえ、そしてたくさんの友達のネットワーク。これを強みに、自分の将来をしっかり見極めたいと思っています。

インターンシップオフィス→P8 06

課外活動

乾 友紀子さん
（経営学部2回生）

学業とシンクロとの両立に苦戦。何が必要かを考えて行動できるようになった。

2010年11月に開催されたアジア大会で、シンクロナイズドスイミングのデュエット、チーム、コンビネーションの3種目で銀メダルを獲得しました。6月のワールドカップで銅メダルを獲って以来の国際大会のメダルでした。

ナショナルチームのA代表に選出されるようになったのは、立命館大学に進学した去年から。

学生としては、学業とシンクロの両立が悩ましいところ。活動は学外なので授業をうけたあとは急いで練習に向かう毎日です。また、春、夏のシーズン中は、国際大会に出場するための遠征や長期合宿などで大学に来られないこともあります。1回生の前期になかなか友達ができなかったことは辛かったですね。授業に出席できない分は、レポート作成や自習で補います。合宿中、朝から夕方まで練習し、クタクタになった夜に机に向かうのも大変でした。でも次第に大学の友達が増えてからは、大学生活も楽しめるようになってきました。支えてくれる人や環境があるので、学業もシンクロも充実して続けられています。口にはしないけれど、夜遅くに練習から帰宅した後、食事を出してくれたりと生活を支えてくれる両親にはとりわけ感謝しています。

シンクロという競技は非常に過酷です。「しんどいな」と思うこともあります。でも世界のトップに立つという目標があるから頑張れる。大学に入って、学業との両立のおかげで時間を有効活用できるようになり、ただやみくもに練習するのではなく、毎日自分を振り返り「今何が必要か」と考えながら自発的に行動できるようになってきました。

スポーツ強化オフィス→P9 07

大学院進学

鈴木貴之さん
（情報理工学部4回生）

MOT進学を決意し、学びが主体的に。人に頼らず、自ら行動できるようになった。

来春、立命館大学院のMOT（テクノロジー・マネジメント研究科）に進学します。理工学研究科に進む学生は多いけれど、MOTを選ぶのはまだまだ少数派。MOT進学を決めた時は、友達からも驚かれました。私の目標は、一技術者として製品づくりの一端に携わるのではなく、これまでにない製品を開発するためのアイデアを考えたり、戦略を練る仕事に携わること。日本は高い技術を持っているにも関わらず、製品や販売力で世界に後れを取っている場合があります。私は、世界屈指の高い技術をより効果的に生かす方策を考えることで、企業や社会に役立ちたいと考えているのです。

とはいえ最初からMOTに興味を持っていたわけではありません。入学当初は、将来はソフトウェア開発などの技術系の仕事ができたらなと漠然と思っていました。視点が変わったのは、プログラミング演習など実践的な授業を受けたことがきっかけです。単にプログラミングなどの技術を習得するだけでなく、「今学んだ技術は社会のどんなところで使われているんだろう」と考えることで、技術の「その先」に目を向けるようになりました。

それまでの私は、授業でわからないことにぶつかると、すぐ友達に答えを尋ねるなど、周りの人に頼るところがありました。でも目標が定まったことで、学び方も主体的に変わりました。世界の先端を見てみたいという気持ちから、1ヶ月間のアメリカ留学も経験。グローバルな視点で働いていくために、今も英語の勉強を続けています。目標を持つと自分で決め、行動する力もついてくる。焦らず自分の道を探すことが大切なのだと感じています。

各学部事務室→P9 08

カバンの中身

カバンの中には、ボランティアコーディネーターのミーティングの際、気づいたことをメモする手帳の他、中国語の教科書、Excel検定や秘書検定用のテキストも。通学中はiPodで音楽を聴いてリラックスします。

カバンの中身

いよいよ就職活動が本格化し始めるので、合同説明会の予定などを書き込む手帳は手放せません。空いた時間には、読書。今読んでいるのは、村上春樹の小説です。文房具や小物にはちょっとこだわっています。

カバンの中身

普段は、午前中を中心に授業を受けた後、夕方から5、6時間練習します。帰宅はいつも11時過ぎ。カバンには、授業で使う資料の他、秘書検定受験を目指しているので、そのテキストも入っています。

2010年アジア大会でシンクロナイズドスイミングのデュエット、チーム、コンビネーションの3種目で銀メダルを獲得。

カバンの中身

カバンの中には、卒業研究のためのプレゼンテーション用の資料の他、英単語の勉強用テキストや、いつも持ち歩いているiPod。これから2月の卒業論文提出に向けて、研究が佳境に入ります。

各課紹介

01

國島さん

学生オフィス

学生オフィスでは、課外自主活動の支援、奨学金などの経済的支援のほか、事件・事故防止に向けた取り組みやトラブルに巻き込まれた際の相談など、学生生活のさまざまな場面を幅広くサポートしています。また学生生活の悩みについて専門家によるカウンセリングや、発達障害など特別なニーズを持つ学生への支援の相談も受けつけています。「課外自主活動について知りたい」「奨学金の制度・募集時期を教えてほしい」「学費納付について相談したい」「何かのトラブルに巻き込まれているようだ」など相談があれば、ぜひ連絡してください。

【衣笠】研心館2階 ☎075-465-8167
【BKC】セントラルアーク1階 ☎077-561-3917

02

星野さん

教職教育課・教職支援センター

本学では、全学部（薬学部を除く）の中学校・高等学校の教職課程に加え、産業社会学部現代社会学科子ども社会専攻には小学校の教職課程を設置しています。単に免許状取得だけを目的とした教職課程の履修は、学部科目の履修計画を困難にしますので、しっかりとした目的意識を持って履修することが必要です。教職教育課では、教職課程の履修や教育実習などの相談、教職支援センターでは、教員採用試験全般の相談に応じ、対策講座・各種ガイダンスなどを開講しています。

【衣笠】至徳館1階
教職教育課 ☎075-466-3420／衣笠教職支援センター ☎075-465-7855
【BKC】ユニオンスクエア1階
教職教育課（BKC）／BKC教職支援センター ☎077-561-5207
WEB: 教職教育課 http://www.ritsumei.jp/kyoshoku/index_j.html
教職支援センター http://www.ritsumei.jp/kyoshokushien/index_j.html

03

中倉さん

エクステンションセンター

理想の進路・就職を実現するために、資格取得や就職試験合格をサポートするのが、エクステンションセンターです。国家公務員や公認会計士などの難関進路をはじめ、旅行業やマスコミなどさまざまなジャンルの講座を開講しています。キャンパス内で開講し、学部での学びと並行しながら受講できる利便性もメリットのひとつ。将来の目標を達成するために、エクステンション講座をどんどん活用してください。

【衣笠】研心館1階 ☎075-465-8297
【BKC】プリズムハウス2階 ☎077-561-2853
【朱雀】中川会館1階 ☎075-813-8285
WEB：http://www.ritsumei.jp/extention/index_j.html

04

山口さん

国際教育センター

国際教育センターでは、海外留学プログラムの実施や「留学フェア」「留学プログラム説明会」「留学アドバイザー（留学経験者）による個別相談」などの留学支援企画を実施しています。外国人留学生には留学生向けの相談窓口を設置し、学生生活や奨学金、在留手続等についての相談を受け付けています。各キャンパス国際教育センターにある「国際交流ラウンジ」では、海外協定大学の資料や留学経験者のアンケートが閲覧できるほか、日本・日本文化関連資料が用意され、国際交流の場として活用されています。

【衣笠】明学館1階 ☎075-465-8229
【BKC】アクロスウィング1階 ☎077-561-3038

05

堀尾さん

サービスラーニングセンター（ボランティアセンター）

多様な形での地域参加型活動を通して、学生が学びと成長を得ることを目的に構築された学習プログラム（サービスラーニング）を企画・運営しています。こうした授業以外にもセンターには、福祉・環境・地域づくりなどさまざまな分野のボランティア情報が集まっており、ボランティアに興味のある学生とボランティアを受け入れたいと考えている地域・団体の出会う場として機能しています。ボランティアコーディネーターや、トレーニングを受けた学生コーディネーターが相談に応じ、学生のやりたい活動を探すのをお手伝いします。

【衣笠】学而館1階 ☎075-465-1952
【BKC】セントラルアーク2階 学生ルーム ☎077-561-5910
WEB：http://www.ritsumei.jp/vc/index_j.html

06

松野さん

インターンシップオフィス

インターンシップの目的は、就業体験を通して大学での学びを検証することです。机上で学ぶことと実際に働くことの違いを知り、社会を知ることで、職業観も見えてきます。インターンシップオフィスでは、インターンシップに関するさまざまなガイダンスやセミナーを開催したり、企業や自治体、NPO団体など多種多様な受け入れ先を紹介しています。

【衣笠】研心館1階 キャリアオフィス内 ☎075-465-7856
【BKC】プリズムハウス1階 学びステーション内 ☎077-561-3398
WEB:http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cr/career/gakunai/int/index-j.html

07

乾さん

スポーツ強化オフィス

スポーツ強化オフィスでは、スポーツ活動を通じた学生の成長と、立命館スポーツの発展のため、体育会クラブを中心とした学生のスポーツ活動を支援しています。また学生が安全に、安心して体育会クラブ活動に取り組めるようスポーツ施設の管理運営、環境の整備を行っています。

【衣笠】研心館2階 ☎075-465-7863
【BKC】アスリートジム1階 ☎077-561-3977

08

鈴木さん

各学部事務室

学部・研究科の教務事務を取り扱うとともに、所属する学生と教員への様々な支援を行っているのが学部事務室です（教務事務とは授業や成績の管理、入学・卒業・休学・復学等の学籍の管理、学生証や各種証明書の発行等に関わる業務）。学部・研究科の開講方針に沿って授業を開講し、日々実施される授業の運営の支援をしています。履修上の相談や学生生活に関わる相談事については、学部事務室で対応します。この他に、学会や学部校友会にかかわる事務も取り扱っています。

法学部	075-465-8175	経済学部	077-561-3940
産業社会学部	075-465-8184	経営学部	077-561-3941
国際関係学部	075-465-1211	理工学部	077-561-2625
政策科学部	075-465-7877	情報理工学部	077-561-5202
文学部	075-465-8187	生命科学部・薬学部	077-561-5021
映像学部	075-465-1990	スポーツ健康科学部	077-561-3760

挫折や壁を乗り越えて成長する
我が子を見守る

親の心配、子どものホンネ。

4年間、正課での学びや課外活動に全力で打ち込むことで、学生は着実に成長を遂げます。しかしその過程では、時に大きな挫折を味わったり、時に迷いや不安を覚えて立ち止まったり、どんな学生も壁を乗り越える経験を重ねています。かたわらで見守る父母の心配は尽きないことでしょう。
今回は、立命館大学で生き生きと学生生活を送り、ひと回り大きくなった学生と、父母が登場。学生の成長の陰にはどんな試練や父母の心配があったのか。ふだんの親子関係から父母の悩み、子どものホンネまでを語っていただきました。

辛いことも自力で乗り越えられると信じてやることが親の役割

親 → **伊﨑裕之**さん・**郁子**さん

子 → **伊﨑亮介**さん（産業社会学部4回生）

case 1

小学3年生で地域の野球チームに入った時からずっと、息子は野球とともに育ってきました。グラウンドを駆け回る息子に声援を送るのが、親としても大きな楽しみでしたね。ただし野球だけでなく、勉強や学校生活もおろそかにしないように、とは努めて言うようにしてきました。立命館宇治高校時代は寮で生活。3年間、勉強とクラブ活動を両立させました。以来一人暮らしをする現在まで離れて暮らしていますから、親子の会話はもっぱら電話です。我が家は比較的会話は多い方。近況や悩みも息子から話してくれます。そんな時は、「あれをしなさい」などと指示はせず、人生の先輩として体験を話したり、励ましの言葉をかけるようにしています。

最大の試練は、大学1回生の時。硬式野球部に入部した矢先の4月、フェンスに激突し、大けがをしたのです。手術とリハビリで1年。広いグラウンドとはかけはなれた生活が続いたことでしょう。監督や周囲からは選手としての復帰を期待されたようですが、2回生になる頃、息子から出た言葉は「マネージャーに転向しようと思う」というものでした。自分が納得できるプレーはもうできないと悟ったようです。リハビリ中もよく話をしましたが、本当に苦しんでいる姿は親にも見せませんでした。こちらも無理に尋ねたりせず、「辛い時は一人で抱え込まないで、友達や周囲の人に相談しなさい」と言うようにしていました。相談相手は親でなくてもいい。打ち明けられる誰かがいることが大切だと思っています。幸い人に恵まれ、友達や多くの人が息子の支えになってくれたようです。マネージャーになって2年半、以前より人の痛みにもよく気づくようになり、いっそう優しく、たくましくなったなと感じますね。

何でも親の言う通りに行動するようでは感心しません。困難も自力で乗り越え、自分で道を切り開いていってほしい。「この子ならきっとできる」と信じてやることが私たち親の役割だと思っています。

子どもの声

小さい頃は、勉強を怠ると叱られたり、両親にはけっこう厳しく育てられました。高校で親元を離れてからは、電話やメールで折りにふれてアドバイスをしてくれ、相談に乗ってくれる心強い存在です。マネージャー転向を決めた時、私の決断を応援してくれたのが嬉しかった。今は、高校の教師になるのが目標。今度は自分が後輩に野球を教えたいと思っています。

広い世界に飛び立つ子どもの背中をそっと押してやりたい

親 → **金本則江**さん

子 → **金本紗季**さん（理工学部3回生）

case 2

娘二人のせいか、小さい頃から親子の会話は多い方でした。気兼ねなく話せる空気や場が家庭にあるので、今も大学から帰ってきた娘にその日にあったことや感じたことを聞くのが日課です。そうしていると帰ってきた時の様子で「辛いことがあったのかな」「悩みがあるのかしら」などと察することができます。もし何か失敗したとしても、責めたり、原因を追及するような言い方はせず、子どもが前向きになれるような言葉を投げかけるようにしています。中学受験に失敗した時にも「これから頑張ろうね」と話しました。心がけているのは、子どもの自主性を大切にすること。友達のように仲良く話をしますが、進むべき道を強制したりはしません。一方で挑戦もせずに「できない」とは言わせないようしつけてきました。

少しずつ自立心が芽生えてきたのは、高校で生徒会会長になった頃から。生徒会で自ら陣頭指揮をとってゴミ分別などの環境保全活動に取り組んで以来環境問題に関心を持ち、自分で調べて立命館大学の環境システム工学科への進学を決めました。大学でも環境問題に取り組むサークルで活動しています。活動では、琵琶湖の環境保全をテーマに大津市議会の方と意見を交換する機会もあるとのこと。大人を相手に堂々と意見を言ったり、自分で世界を広げている姿を見ると、成長したなと思いますね。今もいろいろな話をするのは変わりませんが、親に答えを求めるというよりは、口にすることで自分の考えを整理し、自力で目標や解決策を見出すことにつなげているといった印象です。父親と同じ理系に進んだこともあり、専門的な話を父娘で語り合うことも多いですね。

娘にはこれからもっと大きな舞台で活躍してほしい。海外に飛び出すのも大賛成。娘への信頼感があるから心配はしていません。親として、世界に飛び立つ娘の背中をそっと押してあげるつもりです。

子どもの声

食事を作ってくれ、何があっても温かく受け入れてくれる母に対し、いろいろな世界を見せてくれ、理工系や環境に興味をもつきっかけを与えてくれたのが父。どんなことにもチャレンジできるのは、両親が気づかない力で支えてくれるからだと思っています。サークル活動などでさまざまな人と接するうち、人と関わる仕事につきたいという将来の目標が見えてきました。

4年間の一人暮らしを経て、親が考える以上に子どもは成長

親 → **越智由香里**さん

子 → **越智純也**さん（法学部4回生）

case 3

愛媛県の実家を出て大学に進学した当初は、一人できちんと生活していけるか、とても心配でした。それまで炊事や家事をしたことはありませんでしたから。やはり1回生のうちは、料理や洗濯などはもちろん、一人で規則正しい生活をすることにも苦戦しているようでした。大学でフットサルとサッカーのサークルに所属。たくさんのいい仲間ができ、互いに助け合えるようになったことで、一人暮らしも軌道に乗ったようです。

息子は何でもよく話してくれるものの、離れて暮らしているため、どんな生活をしているか正確にはわからず、もどかしく思うこともあります。就職活動中も厳しい現実に直面し、不安を感じることもあったようでした。どんな進路を選択しても応援するつもりでしたが、息子が選んだのは、地元愛媛に戻って就職する道。もとより地元への愛着の強い子どもでしたが、Uターンを決意した理由はそれだけではなかったと思います。都市銀行に就職し、大阪で勤務する兄や私たち両親のことを思いやる気持ちも大きかったことでしょう。自分だけでなく、家族や他の人のことも思いやり、それを自身の幸せの拠り所にできるような優しさを培えたのも、一人暮らしやサッカーを通して多くの人と協調する経験を経たからだと思います。

実は今年の夏、地元で開催された父母教育懇談会で息子が就職体験談を話すという連絡を受けたんです。これまで何度も学生さんの話を聴く機会がありましたが、どの方もみんな非常にしっかりしておられて、「うちの息子とは違うわ」と思ったものでした。「あの子はきちんと話せるのかしら」と、子ども以上に緊張して迎えた当日。親の心配をよそに、息子は自分の言葉で堂々と発表していました。立命館大学で4年間を過ごす中で、子どもは親が思う以上に大人になり、将来のことも親のことももきちんと考えられるように育つのだと改めて実感しました。

子どもの声

大学では、サークル活動の他、九州一周や日本列島縦断旅行などさまざまなことにチャレンジしました。思う存分学生生活を満喫したことで、かえって卒業後は地元に戻ろうという気持ちが強まりました。一人で生活して初めてそれまでどれほど両親に支えられていたのかを実感。一人暮らしによって自立の一歩を踏み出せたのかなと今は思っています。

NTERVIEW 立命館大学校友インタビュー

このコーナーでは、社会で活躍する
立命館大学の校友（卒業生）を紹介します。

2010年4月、LSI（半導体集積回路）の大手半導体メーカー・ローム株式会社の創業者であり、
本学校友でもある佐藤研一郎氏が名誉会長に退き、同じく校友である澤村諭新社長が2代目を引き継いだ。
世界的な半導体メーカーとして成長を続ける同社の次の半世紀に向けて舵を取る新リーダーは、
「熱意と責任感」を大切にしている。

経営者としての責任

ロームは、創業者の佐藤が連結売上高3300億円、世界中に2万人を超える従業員を雇用する規模にまで大きくした会社です。それを引き継ぎ、さらに成長させていくという経営者としての責任の大きさを実感しています。

例えば社長に就任した直後に起こったタイの暴動時には、企業のトップがいかに大変であるかということをあらためて痛感しました。ロームグループにはタイに大規模な生産拠点があり、その他に販売拠点など合わせて4社が事業活動を行っています。当時は、まず現地の従業員ならびに出張者の安全確保を最優先し、さらに、工場の操業から製品の物流、お客様や仕入先の動向、資金の流れに至るまで、あらゆる面で神経を尖らせて事態の推移を冷静に判断し、トップとして指示を出しました。社長に就任早々、本当に良い経験をしたと思っています。

現在のロームは創業から半世紀が過ぎ、社内では次の50年を「NEXT50」と位置づけ、全社一丸となってさらなる発展を目指しています。リーマンショック以降の低迷からも徐々に脱却しつつあり、次世代を見据えた新技術・新製品も成長の芽となるなど、明るい兆しも見えてきていますので、これをエンジンに成長軌道に乗せていきたいと考えています。

壁を乗り越えた時の格別の一杯

仕事ではこれまで何度も「壁」にぶつかりました。しかし難しい仕事であればあるほど、それを乗り越えた時の充実感は大きく、そんな時に仲間と交わす一杯は格別のものでした。

仕事において私の転機は32歳の時であったと思います。当時、当社の営業拠点は京都本社と東京だけだったのですが突然、浜松に営業所を開設することとなり、その責任者に指名されました。と言っても本社から異動したのは私一人だけです。それまで一人の営業マンとして売上げを上げることしか考えていなかったのですが、営業所の責任者として若い社員を採用し、育て、組織としての成果を上げていくという使命が課せられた訳です。「いかに成果を出すか」日々考え、もがいてもなかなか結果が伴わない中で、悩み抜いた挙げ句、大切にしたのは部下とのコミュニケーションでした。何度も何度も部下と話し合い、「ロームの営業はこうあるべきだ」という自分の思いを熱く語りました。話し合いを繰り返すことで熱意が伝わったのでしょうか。次第に部下の意識も変わり、営業所のベクトルが合い、徐々に売上の向上につながっていったのを覚えています。今から思えばマネジメントの基本なのでしょうが、本社から成果を期待され送り出された当時の私にとって、この「壁」を乗り越えた経験は大きかったですね。余談ですが、もちろんその後、部下とは大いに飲みましたよ（笑）。

実はこの浜松での営業所開設の成功が、その後のロームの顧客密着型の営業展開につながっていった訳です。お客様の生の声やご意見を直接お聞きし、それを開発や製造部門にいち早く展開することの重要性を全社で共有できるようになるきっかけだったと思います。

そして今まさに社長としてその考え方を中国にも展開し始めています。発展著しい中国市場での売上げを伸ばすため、沿岸部はもちろんのこと、内陸部まで販売拠点を開設し、顧客密着型営業を推し進めています。当時の浜松での経験は私にはまさに転機であったといえるでしょう。

私にとって仕事とは「自分を成長させてくれるもの」です。難題を一つひとつクリアしながらステップアップするという経験は仕事以外ではなかなか味わえないものだからです。そのために大切なことは「我慢をすること」ではないでしょうか。山登りを例にすれば、やはり頂上まで行ってみないことにはその良さは分からないと思います。登り始めは頂上も見えないでしょうし、途中では木だけしか見えないかもしれません。しかし一歩一歩どんなに苦しくとも着実に歩んでいくことで、頂上に登りつめたときの景色の素晴らしさに感動し、充実感が味わえると思います。今の若い方々にぜひ申し上げたいことは「どんな状況であっても一度決めたら、諦めず我慢して着実に進んでいただきたい」ということです。

社会貢献活動から広がるロームのイメージ

ロームでは、地域の皆様に楽しんでいただくため、毎年クリスマスシーズンになると本社周辺の木々を彩るイルミネーションを行っています（写真上）。冬の夜空に温かい雰囲気を醸し出すことで、皆様からは大変好評をいただいており、さらに多くの方々にロームという会社のイメージを感じ取っていただければ嬉しいですね。

また、新しい技術開発に向けた研究においては産学連携を積極的に行い、立命館をはじめ、同志社、京都大学に「ローム記念館」（写真下）を寄贈し、新たなプロジェクトの具現化を図っています。立命館大学は企業との連携に前向きで、学生が学ぶ場所として最高の環境が整っていると思います。

さらに「音楽を通して豊かな文化を育みたい」という想いから創業者が設立した「財団法人ローム ミュージック ファンデーション」では奨学金援助やコンサート支援など若手音楽家の育成や優れた音楽の普及に向けた活動を展開しています。支援を受けた方の中から世界的なコンクールで優れた成績を収める音楽家が生まれるなど、日本だけではなく世界の音楽文化の発展に貢献しているのではと自負しています。

立命館で育んだ「力」

子どもの頃はエンジニア志望でしたが、学生生活を過ごす中で次第にコミュニケーション能力について意識するようになりました。

Satoshi Sawamura

難しい仕事であればあるほど乗り越えた時の充実感は大きい

ローム株式会社 代表取締役社長
澤村　諭 さん
（1975年 理工学部卒）

当時の人事担当者もそれを見抜いたのでしょう。入社後は営業畑を歩んでいきましたね。

学生時代はアルバイトでお金を貯め、日本全国を車でよく旅をしました。見知らぬ地を訪れ、色々な人に声をかけて見聞を広めることで人とコミュニケーションをする楽しさを覚えたものです。学生になるまで自分にどんな能力があるかなんてなかなか分らないですよね。私は立命館に在学中の4年間、講義だけでなくアルバイトや旅行など色々なことに挑戦することでコミュケーション力が磨かれ、社会に出る時にようやくその「力」を客観的に認識し始めたと思います。

私は元々理工系の人間ですが、営業を担当し、コミュニケーション力を活かしてお客様と会話することの方が適していたのだと思います。ロームのお客様はすべてプロのエンジニアですので、お客様の話を聞き、何を望んでいらっしゃるか、どんなLSIを提案すれば満足を得られるかということが、会話を通じてできたように記憶しています。

そうそう、大学のことでひとつ思い出しました。卒業後に恩師の井上和夫先生（現立命館大学名誉教授）に、営業職に配属されたことを報告したのですが、その際、井上先生は驚きの様子もなく「君は営業に向いていると思っていたんや」とおっしゃって下さいました。先生のこのお言葉で自分の持ち味を再認識しました。

学生時代とは何にでも挑戦し、自分にどんな能力があるのか、どんな仕事に向いているのかを見つける自分発見の大切な時期なのでしょうね。

教育に望むこと

子どもには魚を与えるのではなく、「魚の釣り方」を教えなければいけません。餌の種類や付け方、竿の長さ、釣りに適した時間や場所があること、また魚によってそれらを変更しなければならないことなど「魚の釣り方」を教えてあげます。教えずに魚を与えてしまうと、やがて彼らは魚を待っているだけで何もできない人間になってしまいます。教育とはそんなものだと思います。

ロームは、企業として「教育訓練基本目標」「教育訓練基本方針」を掲げ、日頃から人材育成に力を入れています。大学もぜひ良い人材を育て、その「人財」を企業に送り出していただきたいと思います。私たちは、その「人財」を大切にして企業活動を通じて社会に貢献し、また大学にも支援ができるようにしていきたいと願っています。

さわむら・さとし
京都府出身。1975年に立命館大学理工学部卒業。78年に東洋電具製作所（現ローム）入社。2005年取締役、07年常務、09年代表取締役専務を経て10年4月に現職。モットーは「虚心坦懐」。

2010年11月20日（土）清々しく晴れわたった秋空の下、衣笠キャンパスとびわこ・くさつキャンパス（BKC）の両会場で、秋のオープンカレッジが開催され、約1500名ものご父母が参加されました。はじめに「進路・就職講演会」「学生生活講演会」「アカデミック講演会」が実施され、それぞれ参加者から高い関心が寄せられました。また講演会終了後には、各学部に分かれて懇談会を実施しました。

Open College 2010 秋のオープンカレッジ

In Kinugasa Campus & Biwako Kusatsu Campus

講演会

進路・就職講演会

衣笠キャンパス

「あきらめない就活～学生の視点・企業の視点～」と題した講演会では、キャリアセンターが就職状況と親ができるサポートについて説明し、親子でキャリアを考えることを提案しました。また厳しさを増す雇用情勢の中で、希望の内定を得た2名の学生が体験談を報告。それぞれの学生生活と就職活動について語りました。

学生の就職活動体験談

政策科学部4回生
レンゴー株式会社内定
岡 龍介さん

綿密な企業・業界研究で、納得のいく準備を

エントリーシートはゼミの先生に添削していただき、友達と見せ合って面接の練習をしました。業界研究では志望のメーカーだけでなく、自分の志向を知るために、敬遠する業界も調査しました。就職活動序盤の面接では、学生生活と入社後に自分がしたいことを結びつけてアピールできなかったのですが、終盤には研究と学外活動での取り組みを社会で働くことに結びつけて伝え、面接官の質問にも的確に答えることができました。就職活動に必要なのは、「自分が就職するんだ」という前向きな姿勢と、早期からの十分な準備です。苦手分野を克服する前に、筆記試験で落とされたら悔しいし、面接やエントリーシートにも慣れが必要です。また、知名度が低くても興味深い企業や、働きやすい企業がたくさんあります。よく調べて熟考し、今後何十年も働ける企業を見つけることが大切だと思います。最後に、就職活動では何十社も受け、そのほとんどに落ちます。そのたびに凹みますが、それは他の学生も同じ。1人で抱え込まずに、時には先生や友達、親などに愚痴をこぼすことをお勧めします。

笑顔を絶やさず、完全燃焼することができた

先輩から就職活動の厳しさを聞いて危機感を持ち、計画的に就職活動を進めようと決心。3回生の夏にはインターンシップに参加しました。自己分析では、日記やブログを見て過去を振り返り、友達やキャリアオフィスの方と話すことで自分の考えを再確認しました。面接では、1つのアピールポイントについて複数のエピソードを語るように心掛けました。就職活動には「超ポジティブ」な姿勢で取り組みました。落ちた時の辛い気持ちは「見返せる人材になってやる」という意気込みに変え、1日でエントリーシートを3つ書くなど、無理なこともやり切ることで自信にしました。また、採用は自分と企業との一対一のもの。競争ではなく、「皆が受かればいいな」という気持ちで笑顔を心掛けました。厳しい就職活動ですが、最後の1社に出会えたら、それまでの努力は無駄ではありません。落ち込んで泣いてばかりいた時、親に電話をしたら京都に来て大好きなきんぴらごぼうを作ってくれました。私の様子に気づいてくれたことが嬉しかったです。

産業社会学部4回生
独立行政法人国際観光振興機構（JNTO）内定
笠井沙織さん

キャリアセンターによる解説

本年度の求人倍率は1.28倍。依然として厳しい就職状況が続きますが、本学の内定報告状況は昨年とほぼ同水準を保っており、学生たちの健闘が伺えます。

本日の就職活動体験談から注目して頂きたい点を挙げますと、まず岡さんが、「エントリーシートはゼミの先生に添削をお願いし、友達と見せ合って面接の練習をした」と語ってくれました。昨今の就職活動では、インターネットで登録や情報収集を行う個人活動が多くなり、それが就職活動に行き詰まる要因にもなっています。そのためキャリアセンターでは、自分のことをよく知る人に相談し、助け合う「団体戦」を推奨しています。それから、「学生時代の経験を社会で働くことと結びつけて語れるようになり、就職活動がうまくいった」という点では、入社後したい仕事を明確に描くためには、企業や職種の研究が必須だと気付いたことがポイントです。

キャリアセンター次長 淺野昭人

笠井さんは、先輩の話を聞いて抱いた危機感を解決するために行動し、自己分析のために日記やブログを振り返っています。自己分析は、過去と現在の自分を結びつける作業です。学生には、その材料として日々の行動や思いを記録にとどめることを勧めています。また面接で、「1つのアピールポイントについて複数のエピソードを語った」という点については、例えばリーダーシップをアピールする場合、ゼミだけでなく、サークル、ボランティアといった3つの視点から語れば説得力が増します。さらに高校時代の経験も加えるなど、時間の軸を通じた縦のつながりと、様々な場面からの横の広がりを話すことが大切です。

講演会 進路・就職講演会 BKC

「あきらめない就活～学生の視点・企業の視点～」と題し、キャリアセンターより2009年度から現在までの就職状況について詳しく説明されました。次いで厳しい社会情勢の中で就職活動を経験し、内定をつかみ取った学生たちが講演し、活動中の心の葛藤や親との関わり方、キャリアセンターの活用の仕方など、生の声を参加したご父母に届けました。

学生の就職活動体験談

経済学部卒業
スズキ株式会社内定
刑部信吾さん

学校や周りを活用して万全の準備・対策を

私は国際経済学科4回生を留年したので、2年にわたって就職活動を経験しました。1年目は周りから遅れて3回生の2月に開始。企業研究などの準備や対策も万全にせず、大企業ばかり受けては落ちるという状態が続きました。結局内定をもらえず、仕切り直すことを決めました。2年目は、地元中心の就職活動を展開。実際に働いている人と話したり、OB訪問することで、自分が働く姿をしっかりイメージしながら志望動機を考えました。また本学キャリアセンターの模擬面接もフルに活用。企業で人事を担当されている方を招いての面接練習では、自分の弱点を知ることができ、とても有効でした。この積み重ねのおかげで、実際の面接にも自信を持って挑むことができました。さらに2年目は、地元で働く社会人を紹介してもらったり、相談に乗ってもらうなど、親の協力を得たことも大きかったと思います。学生は社会人と接する機会が少ないので、学校や親など周りをどんどん活用しながら対策を練ることが内定につながると実感しています。

いつか決まると信じて活動し続ける事が大事

理工学研究科
博士課程前期課程２回生
株式会社中外医科学研究所内定
木村ゆうきさん

理工学部在籍中に参加したインターンシップで、学部での知識では専門性が足りないと痛感し、大学院への進学を決意。就職活動は修士課程1回生の10月頃に始めました。積極的に活動を続けましたが、第1希望の企業面接に通過できず、挫折という苦い経験も。その後、ある企業から内々定をいただいたのですが、専門分野から離れてしまうことに悩みました。結局、就活を続けることに決め、最終的に志望していた医療業界の企業から内々定をいただくことができました。自分の専門性を前面に出してエントリーシートや面接で自己アピールできたこと、その企業でどんなことをしたいのか、はっきり伝えられたことが勝因だと思います。就活で最も大切な自己分析は、内へ内へと向いてしまいがち。けれどさまざまな人と対話し、自分を見つめること、そのためには、何でも話せる環境をつくっておくことが重要です。さらに活動中のスケジュール管理や体調管理徹底も、成否を分けます。何より「いつか決まる」と信じて活動を続けることが大切です。

キャリアセンターによる解説

先日、今年の就職内定率が過去最低と発表されました。確かに厳しい状況ですが、そうした情勢を受けて、本学では万全の態勢で支援を行い、学生たちも頑張っています。本日の就職体験談では、2年目にして内定を掴み取った刑部さんに語っていただきました。確かに最近は、卒業せずに就職活動を続けるという道を選択する学生も全国的に見られます。しかし面接で「この1年、何をしてきたのか」と必ず問われ、より厳しい状況になることをご理解ください。刑部さんの場合は、1年目の自分の甘さをきちっと振り返り、2年目に活かせました。情報を収集(インプット)するだけでなく、模擬面接やOB訪問など積極的に動き、実際の就職活動でアウトプットできたのです。

また木村さんは「エントリーシートは自分の言葉で書く」と話してくれましたが、これは非常に大切なこと。面接では、自らの経験や考えを、しっかり語って伝えることが重要です。さらに「色んな人と話すことで分かって来る」と木村さんが言う通り、今の状況を周りと共有しながら「何がダメなんだ」と話し合うことが大事。父母の皆様にも、状況を共感するという形でお話を聞いていただきたい。厳しい言葉だけでモチベーションを回復できるというものではありません。まずは受け止めて、そして感情を共感してください。本人が気付かない長所を示してあげるなど、ぜひ家庭でもそうした関係を重要視するように接してあげてください。

キャリアオフィス課長 杉町 宏

講演会 学生生活講演会 衣笠キャンパス

瓜生吉則学生主事（産業社会学部准教授）が「ケータイ的コミュニケーションと現代学生気質」と題して講演。今どきの学生を取り巻く環境を、ケータイやネットという新しいコミュニケーションとの関係性から分析し、彼らにとっての「リアル」のあり方について言及しました。お子様とも深く関係する内容は、父母たちの高い関心を集めました。

「便所飯」ってご存じですか？

「便所飯」とは、大学のキャンパスや学食で、1人ぼっちで食事をしているところ（「ぼっち飯」）を友人や知り合いに見られたくない学生が、トイレの個室で食事をすることです。新聞やテレビの情報番組でも取り上げられ、一時話題になりました。

その存在を確かめることは困難なため、都市伝説の1つに過ぎないかもしれませんが、大学生の間では、リアリティのある言葉として流通しています。なぜなら大学生にとっては、食事を一緒にする友達がいるのが普通で、「ぼっち飯」をすることは、その基準をクリアできていないことを公表する恥ずかしい行為。だから、「便所飯」にはしる学生がいても、不思議ではないと考えているのです。

このように、現代の若者は、1人で食事をする孤独（社会的疎外）よりも、一緒に食事をする友達がいない孤独（関係的疎外）を他人に見られることを恐れています。

若者たちの「優しい関係」

もう1つ、現代の若者を取り巻く環境を表す言葉に、「リア充」というネット用語があります。これは、さまざまなつき合いを通して「リアル（現実）」が「充実」しているように見える人を指します。この言葉は、2010年の新語・流行語大賞にもノミネートされました。

この言葉を多用する若者からは、コミュニケーションに対する高い期待値、さらには神経症的な欲望を感じとることができます。彼らが人間関係やコミュニケーションにこれほど敏感になる背景には、ケータイ（携帯電話）の存在が欠かせません。多機能を備えたケータイは、もはや彼らの身体の一部と化し、素早く反応することで人とつながっていることを確認しています。

このような状況から、しばしば最近の若者の人間関係の希薄化が心配されますが、実は彼らは友達との関係性を絶たないように非常に気を配っているのです。相手が困るような重い話題も、ぶつかり合う関係も避けながら、「優しい関係※」を保つことに注力しています。

歴史的な観点から見れば、1970年代以降の社会では、多様な価値観と個性が称揚されるようになりました。反発するべき威圧的な権威がないために、身近な他者からの自己承認を常に必要とする「つながり指向」が生まれたとも言えます。

※土井隆義『友だち地獄』（ちくま新書、2008年）より

求められる「キャラ」の使い分け

「アイデンティティ（自己同一性）」とは、他者との関係で変形しながらも一貫性を保った自己のこと。一方「キャラ」は、ある一面を強調した人格で、仮面のように状況に応じて使いわけることができます。若者たちはキャラを使いわけることで、友達や恋人、親とも衝突せずに関係性を保っているのです。

また、ネット社会の発達によって、自分好みのコミュニティを探すこともできるようになりました。必然的にコミュニティの空気は安定しますが、それと同時に、コミュニケーション回路を絶たれる不安は以前よりも強くなり、そこでも違いを見せないようにキャラを演じ続けなければならなくなります。いずれにしても、キャラの適切な使いわけばかりが求められるので、本人は疲弊していきます。

「つながる」ことと「同質である」ことの違い

では、いっそのこと若者からケータイを取りあげたらどうでしょうか？ いえ、現実のコミュニケーションの場においても「キャラ」を演じ、「優しい関係」が強いられる以上、それは解毒剤にはなりません。

彼らに必要なのは、他者とコミュニケーションをとる意味をきちんと把握すること。ケータイやネット上では、似た者同士でつながることを指向しがちですが、「つながる」ことと「同質である」ことはイコールではありません。相手は自分とは異なる人格を持った人間であることを認識することが必要。他者との違いや、そこに生じる誤解を乗り越えるためのコミュニケーションを通して、身近な人との信頼関係を築くことが大切なのです。

講演会

学生生活講演会

BKC

毎年全国で開催されている父母教育懇談会は、ご父母が大学生活に対して抱くさまざまな不安を知る1つの機会となっています。学生生活講演会は、野方誠准教授（理工学部）が、父母教育懇談会で多く聞かれた不安に答える形で進行。その後、「自主的・主体的な活動への参加と大学教育の役割」と題し、課外活動の大切さについて語りました。

きめ細かいサポート体制で学びと就職を支援

「わが子がどのようなキャンパスライフを送っているのか知りたい」という声をよく耳にします。この機会にぜひ不安を解消していただければと思います。

まず多く聞かれるのが「授業についていっているか?」という不安です。日頃から、教員が授業の理解度に関するアンケートを行ったり、質問を受けつけたりして学生がついてきているかを把握しています。また演習や実験では、大学院生や3・4回生の補助スタッフを配置し、よりきめ細かい指導を実践しています。定期試験前には教員や大学院生が質問を受けつける「学習相談会」を、試験後には基準単位数に満たない単位僅少者を対象とした個人面談を行っています。「4年で卒業できるかしら?」という心配もあるかと思いますが、学生は履修科目の出席回数、レポートの提出状況などをウェブ上で確認し、手遅れになる前に自分で対応することが可能です。また、保証人の方には成績表のほか、単位僅少者である場合はその旨を知らせる書面も郵送していますので、ご確認いただければと思います。

次に、「就職できるか?」という不安についてです。本学ではさまざまな支援を段階的に展開しています。入学直後に進路ガイダンスを行い、1回生からキャリア教育の授業・プログラムを多彩に用意しています。特徴的なのは、1回生から3年間を通じて、所属する学科を選んだ目的、注力すべきこと、将来の目標などを記入する「キャリアシート」。自分自身を見つめ直し、ステップアップすることができます。就職活動が始まる時期からは、各種ガイダンス、学内企業説明会、内定をもらった在学生や就職した卒業生によるアドバイス、キャリアセンターによる模擬面接指導など、多角的な支援を実践しています。

快適で安心・安全なキャンパスライフを確保

学生生活に対する不安としては、「クラスメイトとうまくやっているか?」「食事はきちんととっているか?」「病気はしていないか?」「事件に巻き込まれはしないか?」「困ったときにはどうしているか?」などが聞かれます。

まずクラス単位で取り組む機会を数多く設け、仲間づくりを後押ししています。特に1回生のサポートを目的とした学生団体・オリター団が講師を務めるサブゼミでは、多様な取り組みを通じてクラスメイトとの絆を深めることが可能です。

その他の不安については、キャンパス内の設備を充実させることで対応しています。複数の学食があり、ここBKCでは朝8時半から夜9時半まで食事を取ることができます。内科医や精神科医が常駐する「保健センター」を備えているほか、事件・事故・学費などに関する申し出を受けつける「学生オフィス」、プロのカウンセラーに相談できる「サポートルーム」など各種窓口も設置。安全な学生生活に向けては、ガイダンスやパンフレット、ホームページを通じて注意を喚起しています。

社会人としての素養を培う課外活動を推奨

充実の支援体制で、安心して学業に取り組める環境を整えていますが、学生生活において大切なのは、正課の授業だけではありません。社会で活躍するためには、専門的な知識・技術はもちろん、人間力、企画行動力、問題発見・分析・解決能力、危機管理能力など、正課の授業では得られないプラスαの能力も求められるからです。

そうした能力を身につける方法の1つが、自主的主体的な活動、すなわち課外活動です。本学では、プラスαの能力を備えた学生を輩出していきたいとの思いから、キャンパスごとの自治会、学部ごとの自治委員会、オリター団、TAなど、自主活動のシステムや場を設けています。

大学に学生の要望を伝える自治委員会の常任理事を務めた学生は、「活動年間方針について、その必要性や意義を説明するのは大変だったが、議論を通じて具体性が増し、団体としても1つの方向に向かわせることができた」と語ってくれましたし、オリター団のリーダーは、「各自に役割を理解させることに苦労した。一人ひとりが考えて行動することで、活動の質を大きく向上させられることを実感した」と答えてくれました。今後もより多くの学生に、自主的主体的な取り組みを通じて、社会で活躍するための素養を養ってほしいと思っています。

講演会

アカデミック講演会

衣笠キャンパス

長く学齢期のアスリートの栄養支援に携わり、2008年に開催された北京オリンピックでも、日本選手団の栄養管理を担当した経験を持つ海老久美子教授（スポーツ健康科学部）。「元気は『食』から」と題した講演では、特に力を注いできた高校球児の栄養管理を例にとり、「食」を楽しみながら健康的な心身を維持する方法について語りました。

運動、栄養＝食事、休養が強いアスリートを育てる

私は、長く学齢期のスポーツ選手の栄養支援に携わってきました。とりわけ身体的に大きく成長を遂げる時期に人生で最も過酷な運動量を消化する中学・高校生を見る中で、スポーツ選手にとって「食」がどれほど大切かを実感してきました。本日は、トップアスリートにとっての食事の重要性をお話しし、会場の皆さま方にも役立てていただけるアドバイスにつなげたいと思います。

ジュニアのスポーツ選手がトップアスリートに育っていく過程で必要な力は、ピラミッド構造で表現することができます。まず1番底部、心と体の土台となるのが「基礎体力」です。その上に、練習するために必要な体力、すなわち「専門体力」が培われます。この2つの体力があって初めて技術、戦略を身につけることができ、強い選手に育っていくのです。そして、すべての土台となる基礎体力をかたちづくるのが、食事＝栄養です。

加えてスポーツを続けるには、「コンディショニングトライアングル」と呼ばれる、「運動」、「栄養」、「休養」の3要素も不可欠です。運動だけに注力しても、強くはなりません。運動の目的は、あくまで身体を強化すること。運動で身体を疲労させ、そこにエネルギーとなる栄養と、休養の両方を注ぐことによってこそ、強い身体は育っていくのです。

ライフステージごとに食事のポイントを考える

スポーツ選手に求められる食事は、ライフステージごとに留意点が異なります。たとえば小学時代は、味覚と食習慣をつくる時期。ここでしっかりした食習慣を身につけることが、その後の「宝」になります。朝食にご飯（米）を食べる習慣がなかったために、たくさんのエネルギー源を必要とする中学生・高校生になって食事に苦労するスポーツ選手を数多く見てきました。次に中学時代は身体の成長に合わせた食事量を、さらに高校時代は各競技の運動量に合わせた食べ方がポイントになります。そして大学時代は、「食の自立」の時。飲酒や喫煙が認められ、自由に行動する時間が増えるだけに、自分が食べるべきものを自分で選べることが、選手生命や成績を大きく左右します。最後に社会人やプロの選手は、長く現役を続けると同時に、引退後、健全な一般人に戻る食事が課題となります。

運動と栄養摂取のバランスが増量・減量成功の近道

2004年に私は、増量を望む高校野球選手の食事について研究したことがあります。甲子園に出場した選手の体組成を調査した結果、体脂肪率が低く、非常に筋肉質であることがわかりました。そんな彼らの多くが、増量を望んでいるにもかかわらず、「食べても体重が増えない」という悩みを抱えていました。原因の1つは、摂取栄養素のバランスが適切でなかったことでした。

増量や減量に影響する要素の1つに、筋肉量があります。筋肉はエネルギー消費や基礎代謝に深くかかわっているため、筋肉の多い人は、太りにくい身体になります。筋肉増強にタンパク質が必要なことは、多くの人がご存じでしょう。けれどそれだけを摂取しても、筋肉は大きくなりません。また炭水化物を極端に控えてダイエットしようとするのも間違いです。炭水化物を摂取しないと、体内でエネルギーが不足し、筋肉づくりに使われるはずのタンパク質がエネルギーとして消費されてしまうからです。エネルギー消費量に見合った炭水化物を摂取し、その上でタンパク質やビタミンといった栄養素をバランスよく摂取しなければ、筋肉増強も、減量も、成功しません。

私がトップアスリートにするアドバイスをいくつかご紹介しましょう。たとえばビタミンとしてホールフルーツを常備することをお勧めします。その場でむいて食べる方が、手軽でかつ効率的に栄養素を摂れるからです。また地産地消も大切だと考えています。ジュニアの選手たちを支えてくれるのは、地域の人たちです。よく言うのは、「商店街のお豆腐屋さんと仲良くなりなさい」ということ。豆腐だけでなく、がんもどきや厚揚げなど「お豆腐屋さんの工夫」の品々は、カルシウム、脂質といった必要栄養素を摂取できる格好の食品です。

運動と栄養摂取のバランスを取ることは、一般の方々にとっても非常に重要です。まず定期的に体重、体脂肪率を測定すること、そして無理のない運動を長く続けながら、炭水化物も、タンパク質も、脂質も過不足なく、おいしく摂ること。これこそ健康的な身体を手にする近道なのです。

講演会 アカデミック講演会 BKC

BKCでは、20年にわたって国内外の伝統的住居・集落・都市のフィールドワークにあたってきた及川清昭教授（理工学部）による講義が行われました。自らが出演、監修したテレビ番組の映像や写真などを交えて世界各地のユニークな住まいと集落を紹介し、居住文化の多様性について解説しました。

自然環境、社会環境が生んだ居住文化の多様性

世界のさまざまな住まいは、その自然環境、社会環境に対応するように造られています。その形態を特徴づける要素の1つとして挙げられるのが「場所」。「世界一高い湖」として知られるペルーのチチカカ湖には、葦を積み重ねて造った人工島の上に、やはり葦で造った家があります。なぜ湖の上で暮らすのか。それは、昼間の太陽熱を吸収する湖上では、アンデスの夜の寒さをしのぐことができるからです。ここでは子どものおやつも燃料にも身の回りに生えている葦を使っていて、完全なエコ生活といえます。

住まいの「形」という意味では、ベトナム・エデ族の住まいも特徴的です。全長が約25メートルもあり、大家族が住んでいたといわれています。

また「材料」は、自然環境と密接に関わっています。チリには石で造った家、モロッコには泥を使ったカスバという要塞住居が見られますが、いずれも現地で簡単に調達できるものばかりです。インドネシア・スンバ島の住居には、床・壁・屋根のすべてに竹が使われています。もう1つ、特徴的なのが大きなとんがり屋根。この内部、つまり屋根裏は神の宿る天上界を象徴しており、何もないのですが、非常に大切な空間と考えられています。私たちの近代住居を振り返ると、床の間をなくしたり、玄関を必要最低限の広さに抑えたりと、「無駄なスペースをなくそう」という流れが見られます。スンバ島の神が宿る大屋根を見ていると「私たちの住まいは本当にこれでいいのだろうか」と、改めて住まいのあり方について考えさせられます。

独特のビジュアルにもすべて理由がある

次に住まいの「機能」について考えます。「世界最古の摩天楼都市」として世界遺産にもなったイエメン・サナア旧市街は、交易で栄え豊かだったため、絶えず抗争にさらされてきました。そこで堅固な城壁で囲まれた、限られた空間を有効利用するために生まれたのが、高さ15メートルの塔状住居でした。

アフリカのサバンナの住まいは、大きな穀倉を備えています。カメルーン北部の集落では、住居内に高さ3メートルほどの穀倉がたくさん並んでいます。開口は上部のみで天井が張られているため、1階からは穀物を取り出せません。わざわざ屋根裏に上がって穀倉に入る構造にすることで、財産である食べ物を抗争から守ったのです。住居の大切な役割は、生命と財産を守ること。イエメンの要塞集落やサバンナの穀倉には、そのために人々がどれほど尽力してきたかが表れています。

一方、住居ではない、儀式や集会に使われたコミュニティ施設の場合は、共同体を維持するためのシンボルとしての役割が重要視されました。立派なコミュニティ施設が、中国、ベトナム、マリなど、世界各地に見られます。

最後に、その色彩に目を奪われる美しい街をご紹介しましょう。「ブルーシティ」と呼ばれるインドのジョードプルです。この色には、蚊を寄せつけない色として青に統一したなど、諸説があります。同じくインド・ジャイプールには、「ピンクシティ」もあります。イギリスの王子を迎える際、歓迎の意味をあらわすピンクに塗ったのが始まりといわれています。

世界の伝統的住居は環境配慮型デザインの宝庫

多様な居住文化を踏査して言えることは、私たちの想像を絶する構想力、表現力に満ち溢れた伝統的な住まいこそ「環境配慮型デザインの宝庫」であるということです。場所性、自然性、主体性、共有性、象徴性、持続性のいずれをとっても、環境共生住宅に求められる特性と合致しており、気候や地形などの環境条件を巧みに活用した独創的な住まい方を見出すことができます。現に、地球環境問題に対する関心が高まっている昨今、伝統的な居住文化が再び注目を浴びつつあります。

世界各地で、少し前まで普通にやってきたことをもう1度振り返り、自分たちの現在の住まいを再考することが、これからの持続的な住まい、ひいてはサステナブルな社会の構築を考えていくヒントになるのです。

学部別懇談会 法学部

「司法」「公務行政」「国際法務」の3つの特修課程で、多様な学生のキャリア形成を支援

徳川信治副学部長の挨拶と学部紹介から全体会が始まりました。「本学部には、全国から集ったさまざまな個性を持つ若者が、刺激し合いながら法と政治を学ぶ場があります。そのため志望進路も多様です。それに対応できるよう『司法』『公務行政』『国際法務』の3つの特修を設置。また、学生の成長に合わせたサポートも行っています」

続いて進路・就職については、キャリア形成の重要性が指摘されました。「キャリア形成に関わる科目のほか、インターンシップなどの実習や自主企画演習など、進路・就職へのきっかけづくりとなるプログラムを多数用意しています。就職活動では、そうした活動や学生同士の対話の中で自らがどんな人間か、どのような役割が求められているかに気づき、目標に向けて行動したかが問われます。その他専門性を深めるゼミでも、社会で求められるコミュニケーション能力を養うことができます」と述べられました。

また、大学院については樋爪 誠副学部長から、「法学研究科を修了後、民間企業に進む学生が増えています。学部4回生での就職活動を経て自己を発見し、大学院でその長所を伸ばしている学生もいます」と現状が報告されました。

就職内定者と法科大学院進学者が学生生活と就職活動について述べた後は、成績通知表の見方なども説明され、全体会は終了。その後は「就職・大学院進学」と「成績・学習」の2グループに分かれて懇談会が開かれました。

学生の体験談

家族の支えに感謝した就職活動

法学部4回生
ノバルティスファーマ株式会社内定
藤田えりかさん

UBC・ジョイント・プログラムで留学を経験し、自分で考え、行動する力が身につきました。働きながら資格を取り、専門性の高い仕事へとキャリアアップしていけるところに魅力を感じ、製薬と金融業界を志望。けれどなかなか内定を得られず、辛い思いをしました。もがき苦しむ私を支えてくれたのは家族でした。活動内容を母に報告することで、自分の頭の中を整理できました。大手企業に固執するのではなく、自分に合った企業を見つけられるようサポートしてくれたのもありがたかったです。

両親のためにも猛勉強して合格

法学部4回生
大阪市人事委員会内定
芝野佑麻さん

2回生までは遊びとアルバイトに明け暮れる毎日でした。3回生を前にしてゼミを決定する時、初めて進路について深く考え、安定して働き続けられる公務員を目指すことにしました。3回生の後期からは、アルバイトも辞めて猛勉強。苦手な面接は、想定質問集をつくったり、キャリアオフィスの模擬面接に毎日のように通って対策しました。「下宿も予備校通いも許してくれた両親のためにも合格するんだ」という強い気持ちが、合格に導いてくれたと思います。

覚悟を決めて進学したロースクール

法科大学院1回生
大久保陽久さん

ロースクールを受験したのは、実は自分の実力を知るため、という軽い気持ちからでした。地道な勉強と学生法律相談部での経験のおかげで合格したものの、強く法曹を目指していたわけではなかったため、進学するか悩みました。一旦就職活動も経験。そこで初めて自分が「人に教える」「法律を使う」仕事に興味を持っていることに気づきました。進路を選ぶ際には、受験など目の前のことにとらわれるのではなく、将来どんな人物になりたいかを考えることが重要だと実感しました。

メーカーの法務部で働くことを希望

法学研究科2回生
シャープ株式会社、株式会社ニコン内定
松岡恒平さん

「生きていく上で必ず関わってくる法律って、本当はどんなものだろう?」。その疑問に答えを見つけるために、法学研究科へ進学。少人数制の授業で、先生や仲間と話し合うことで、より深く理解することができました。希望の進路をつかめた要因は、想定問答を暗記するのではなく、面接官の質問をしっかり聞き、考えながら的確に答えたから。就職は企業とのマッチングです。いろいろな企業を見て、自分の可能性を幅広く試すことが自分の進路を見つける近道だと思います。

司法書士の資格取得後に金融へ就職

法学研究科2回生
株式会社三菱東京UFJ銀行内定
橋本康平さん

3回生から予備校に通い、4回生の秋に司法書士資格を取得。司法書士の研修で税理士さんと出会い、さらに「税法を勉強したい」という気持ちが膨らみ、大学院に進学しました。就職活動では、企業名に左右されず、どんな仕事ができるかを重視する、つまり「就社」ではなく「就職」するのだという気持ちを持って臨むよう心掛けました。面接では、熱意を伝えるために入社後に自分が何をしたいのかを明確に語るようにしました。もしお子さんにやりたいことがあれば、支援してあげてください。きっと就職にもつながるはずです。

学部別懇談会 産業社会学部

多様な学問領域に触れ、主体的に学び、自ら可能性を拓く力を育む

山下高行副学部長が司会を務め、全体会が始まりました。壇上にあがった佐藤春吉学部長は、挨拶の言葉とともに「産業社会学部では、『アクティブ・ラーニング』を教学の柱の1つに据えています。これは、課外活動やフィールドワークといったさまざまな活動を通じて学生が主体的に学びを深めていくというものです。おかげで本学部では、学生が自らイベントを企画・開催するなど、主体的、活動的に学び、共に成長する気風が育っています」と学部の特長を表わしました。

続いて松田亮三副学部長が、産業社会学部の学びについて解説しました。「本学部では、『アクティブ・ラーニング』と並んで『クロスオーバー・ラーニング』にも注力しています。これは本学部の5つの専攻を結びつけ、横断的に学べる仕組み。多様な学びの中で学生の興味を発展させることを可能にしています」と概説。さらに4年間の学びの流れも説明されました。「1回生は基礎演習を中心とした小集団教育に基軸を置いています。2回生では、『プロジェクトスタディ』としてやや手ごたえのある学びに挑戦しつつ、専門科目を履修し始めます。さらに3回生のゼミ形式の小集団で、自らのテーマを見つけ、研究を深めていきます。卒業後の進路を視野に入れ、正課の学びだけでなく、課外活動も充実させてほしい。その上で4回生で学びの総括に取り組むのが理想です」とまとめられました。

続いて5人の学生によるパネルディスカッションが行われ、全体会は終了。その後はグループ別懇談会、個別相談が催されました。

パネルディスカッション

コーディネーター
瓜生吉則准教授

産業社会学部4回生
高速道路管理会社内定
岩永礼美さん

産業社会学部4回生
建設・不動産会社内定
永田 諒さん

産業社会学部4回生
食品製造・加工会社内定
藤井龍郎さん

産業社会学部4回生
システムインテグレーション会社内定
藤田 遼さん

産業社会学部4回生
ケーブルテレビ局内定
山﨑かおるさん

多角的な学びで多様な興味に応えてくれる

司会　正課の学びで得たものは？

藤井　授業で、福祉や社会などさまざまな視点からメディアについて学習。そこから自分の興味を見つけることができました。

藤田　「クロスオーバー・ラーニング」など、多角的な学びで、学生の多様な興味に応えてくれるのが、産社のいいところです。

山﨑　自分でテーマを見つけ、アプローチ法を考え、調査し、考察する。ゼミを通してこうした研究のプロセスを経験し、自分で考える力がついたと感じています。

課外活動を通して「自分」を発見

司会　正課以外に取り組んだ活動は？

岩永　国際平和ミュージアムで学生スタッフをしていました。子どもや外国人、高齢者などさまざまな来館者に合わせた対応を学び、相手の立場になって考える力がつきました。

永田　私は、自治会活動に力を注ぎました。産社の学生が参加するスポーツ大会を企画、成功させたことが思い出深いですね。課外活動を通して人間関係が広がったこと、自信をつけられたのが、収穫でした。

藤田　自主ゼミやアルバイト、インターンシップなどさまざまな課外活動を通して「自分は何が好きなのか」を発見できた。それが進路を選択する上での指針になりました。

親に弱音を吐いても温かく見守っていてほしい

司会　就職活動はいかがでしたか？

山﨑　3回生の今頃までは進路を決めていませんでした。就職活動で幅広い業界を見る中で、地元新潟で就職する道が見えてきました。

岩永　私も就職活動を通して社会のことや企業のことを学び、少しずつやりたいことを見出していきました。最初から目標が定まっている人ばかりではありません。まずは行動してみることも大切だと思います。

藤井　最初は周りに流され、自分の将来を真剣に考えないままに就職活動を始めました。けれど最終面接で落とされることが続き、改めて将来を考えました。その結果、6月末に内定を得ることができました。

藤田　就職活動中は、うまくいかなくて落ち込むこともありました。親に弱音を吐いたことで、気持ちが楽になりましたね。

永田　うちの場合は両親が心配のあまりしょっちゅう進捗を尋ね、かえって精神的に追い詰められることがありました。子どもは自分の進路を本気で考えています。時には信じて見守ってくれることも力になると、皆様にも伝えたいです。

司会　弱音を吐いても温かく見守ってくれる存在が、辛い時の踏ん張る力になります。どうかご父母の方々も、お子様の支えになってあげてください。

学部別懇談会 国際関係学部

国際教育のさらなる推進を目指して、2011年にグローバル・スタディーズ専攻を新設

全体会では、まず挨拶に立った板木雅彦学部長から、来年度国際関係学部は大きく改革することが告げられました。「グローバル教育をさらに推し進めるべく、2011年、グローバル・スタディーズ専攻を新設します。国際関係学専攻とグローバル・スタディーズ専攻の2専攻制に改編。新しく設定するカリキュラムや科目を通じて、在学生にもいっそう国際的な学びの機会を提供する予定ですので、楽しみにしてください」と語られました。

続く君島東彦副学部長から、新専攻についてさらに詳しい内容が明らかにされました。「新専攻では、すべての授業を英語で展開します。世界中から留学生を募るとともに、多国籍な教員陣も揃える予定です。国際色豊かな教員による授業は、もちろん在校生にも開講します。これまで以上に国際的な環境が実現することで、学部全体にも良いインパクトを与えるはずです」と紹介。「言語と理論、そして地域を有機的に結びつけるのが本学部の特長。新しいカリキュラムでも、その強みをしっかり追求し、グローバルに活躍できる人材育成を目指していきます」と抱負を述べました。

次に西村智朗副学部長が、学生生活について説明しました。1回生の少人数による基礎演習に始まり、2回生では国際関係学部の大きな特徴の1つであるGSG(※)を経験する他、インターンシップや留学などの制度も充実していることを報告。「さまざまなプログラムを用意し、『一歩踏み出したい』と考えている学生を力強く後押します。ご父母の皆様もなにとぞ『留学したい』といったお子様の意欲を応援してあげてください」と締めくくりました。

その後は社会で活躍する卒業生が学生生活について発表。グループ別懇談会でも学生による体験談が語られました。

※GSGグローバル・シミュレーション・ゲーミング：学生が主体となって企画・運営し、国際社会の外交を擬似体験する本学部独自の授業

卒業生の体験談

大学での4年間が将来の方向性を決める

2009年
国際関係学部卒業
株式会社みずほ銀行勤務
玉城紘貴さん

今振り返ると、大学生活は将来の方向性を決める上で、非常に重要な時期でした。国境に接し、国際関係に敏感な沖縄県で育ったことから、自然と「将来はグローバル社会で働きたい」という気持ちを膨らませ、国際関係学部を志望しました。入学して何より刺激的だったのは、高い問題意識と志を持った大勢の仲間に出会ったこと。3回生のゼミでは、ゼミ生全員で意見をまとめ、90ページにわたる論文を仕上げました。客員教授だった故・筑紫哲也先生から教わった「書を『持って』町へ出よう」という言葉は、今も私の指針です。現在は法人営業を担当しています。将来は日本とアジアの共存共栄に貢献するような仕事をしたい。大学で描いた夢を必ず実現するつもりです。

学生の体験談

留学、インターンシップで成長し、将来を見極める

国際関係学部3回生
長堀将幸さん

高校時代から海外に興味があった私は、3回生の時、立命館・UBC・ジョイントプログラムを利用し、8ヶ月間、カナダの大学に留学しました。留学先では、さまざまな国の学生とディスカッションし、多様な意見に触れるとともに、それをまとめるというプロセスを経験できたことが収穫でした。また帰国後の今年8月には、(株)ANA総合研修所でインターンシップを経験しました。パイロットになることは、中学時代からの夢。実際の現場を見て憧れだけではできない厳しさを知り、いっそう目指す気持ちが強くなりました。インターンシップは、「働くこと」について考える絶好の機会です。おかげでパイロットは夢ではなく、「目標」に変わりました。

積極的に行動し情報を収集することが就活成功のカギ

国際関係学部4回生
東京海上日動火災保険
株式会社内定
川村桃李さん

就職活動を始める前に3社でインターンシップを経験したことで、「多くの人とかかわる仕事に就きたい」と思うようになりました。実際にエントリーし、面接までたどり着いたのは50～60社。4月に希望の企業から内定を得ました。就職活動は、想像以上に過酷でした。地元名古屋の他、東京、大阪で行われる面接に参加するため、月に何度も夜行バスで往復しました。私は教職課程を履修しているので、授業とバランスを取るのにも苦労しました。実感したのは、「情報」の重要性です。インターンシップに参加したり、先輩に相談するなど、積極的に行動する中で有意義な情報をたくさん収集できたことが、内定につながったと感じています。

学部別懇談会

政策科学部

幅広い専門知識と問題解決能力を身につけ、実践的に社会貢献できる人材を育成

全体会では、本田 豊学部長の挨拶の後、小杉隆信副学部長が学部教育について説明しました。「本学部をよく『社会の医学』に例えます。私たちが育てるのは、医者は医者でも町医者です。いろんな分野にまたがる知識がなければ、本当に必要な政策を立てることはできないからです。本学部の主たる目的は、社会の問題を解決するプロセス、並びにその方法論と実践を学び、社会貢献できる人材を育てることです。そのため講義で身につけた基礎知識を応用して自ら問題を設定し、自分の足を使って問題解決に取り組めるよう指導しています」

続いて、石川伊吹学生主事が就職内定率について報告。「大学新卒者の内定率が年々低下する中、本学部は高い就職率を維持している学部の1つであり、これは、本学部での学びをしっかり吸収し、物事をさまざまな側面から見る力を育んだ学生が、企業で高く評価されているからだと考えます」と分析しました。また就職活動については、「早い段階からキャリアについて考え始めた学生が良い結果につながる傾向にあります。自分の将来を考えることで社会に目を向けるようになり、それが政策科学の学びへの関心につながります。それが希望の進路をつかむ結果に表れているようです。しかし一方で、どうしても結果に結びつかない学生もいます。苦しいでしょうが、そでも自分と向き合い、試行錯誤するいい機会です。人間的に大きく成長できます」と話しました。加えて問題を抱えていても相談できない側面を持つ学生が増えていることも紹介。子どものことで気になることあれば相談するようにとご父母にも勧められました。

引き続いて回生別の懇談会が開かれ、希望者には個別相談も行われました。

学生の体験談

正課と課外の学びをリンクして取り組んだ大学生活

政策科学部3回生
末廣芽衣さん

大講義で理論を学ぶ一方、小集団クラスのグループワークで実践的に学べる点が本学部のいいところ。特にグループワークでは、論理的・多角的・批判的に考えるという訓練を積み、また仲間と協力することや分業の大切さを学びました。また課外ではオリター団に所属し、1回生の学生生活と勉強の両面を支援する活動に取り組みました。活動を通して気づいたのは、グループワークは各人の得意、不得意を補い合うものだということ。その経験を2回生の研究フォーラムに生かすなど、正課と課外の学びをリンクさせて取り組むことを心掛けてきました。今後ゼミナールでは、自分の興味分野や問題意識を掘り下げて、論文を書き上げたいと考えています。「充実した学生生活を送ることができた恩を社会に返したい。学んだことをさまざまな人に伝えたい」という思いから教職も視野に入れて進路を模索中です。しっかりと自分を見つめて進路を選択したいと思っています。

就活のマニュアル本より、自ら考え取捨選択する力を

政策科学部4回生
シャープ株式会社内定
牛島和哉さん

就職活動では、よく「政策科学部ってどんな学部?」と聞かれました。それが話のきっかけになり、会話が膨らむことが多かったです。社会には就職活動についてのマニュアル本も数多く出ています。けれど結局は自分で考えて情報を取捨選択することが成功につながると実感しています。もしお子さんが大量にマニュアル本を買い込んでいたら、心配してあげてください。私が親に感謝しているのは、「就職活動で何度東京に行っても、地元に帰ってきても気にしなくていい」と言って交通費を援助してくれたこと。就職活動では、金銭的な援助も非常に心強いものです。反面、進路選択は本人の自主性に任せてほしい。「何がしたいかわからない」というお子さんには、「こんなことが好きだったよ」と教えるだけでもアドバイスになります。就職活動には運や巡り合わせがあります。内定を得られなくても決してお子さんがダメなわけではありません。どうか温かく見守ってあげてください。

学部別懇談会

文学部

初年次教育からキャリア教育まで少人数教育を根幹とした質の高い教育を提供する

菊池ゆかり事務長の司会のもと、全体会が幕を開けました。挨拶に立った桂島宣弘学部長は、2010年に立命館大学が創立110周年を迎えたことに触れ、「新たに『教育の質の向上』を目標に掲げ、次の歴史をつくっていきます」と決意を述べました。その根幹をなすものとして、少人数教育を紹介。また学びの基礎をつくる初年次教育、さらには昨今の厳しい就職状況にあっても希望の進路をつかみ取れる力を養うキャリア形成も重視していることが語られました。

続いて竹村はるみ准教授が登壇し、「シェイクスピアと劇場都市ロンドン」と題したアカデミックミニ講義を行いました。シェイクスピアは、16世紀終わりから17世紀初頭にかけて活躍した劇作家で、現在でも世界中で作品が上演される人気作家の1人です。竹村准教授はまずシェイクスピアが活躍した時代のロンドンの地図を紹介。市街を流れるテムズ川両岸に約20もの劇場が軒を連ねていた様子を示し、当時のイギリス人の演劇に対する関心の高さと、それを可能にした都市の繁栄ぶりを説明しました。「今でこそシェイクスピアは高尚なイメージを持たれがちですが、当時は誰もが楽しめる大衆演劇の作家でした」と、竹村准教授。シェイクスピアの時代、常設劇場は天井のない屋外舞台で、身体的にも心理的にも観客との距離の近い「張り出し舞台」だったことや、男性だけで演じられたことなど、現在の演劇との違いが語られました。最後に竹村准教授は『ハムレット』の一節を引用しながら、シェイクスピアが芝居をどう捉えていたかを解説しました。「芝居とは、人が日頃は見えていない現実を映し出す鏡。現実をいかに表現するか、文学、芸術にとっても永遠の命題なのです。」として講演は結ばれました。

次いで学生による体験談が披露された後、専攻別懇談会が行われました。

学生の体験談

「人とのつながり」が大学で得た1番の財産

文学部4回生
株式会社日本公文教育研究会内定
江本貴則さん

正課では、日本文学を専攻。現在島崎藤村をテーマに研究に打ち込んでいます。課外活動では、上級生が新入生の学びや生活をサポートするオリター団に所属。活動を通じてたくさんの人と出会い、つながりの輪が広がりました。就職活動は想像以上に厳しかったです。3回生の11月頃から本格的に動き始め、内定を得たのは7月末。約10ヶ月間、スーツを着ない日はほとんどありませんでした。辛い時期、支えになったのは家族の存在です。同じように苦労している友達には言えないグチを聞いてもらうだけで気持ちが楽になりました。大学で得た1番の財産は「人とのつながり」です。子どもにもそんな出会いを提供したいと思い、教育業界への就職を決めました。

目標を立てて努力したことで学生生活が充実

文学部4回生
三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社内定
藤 由加里さん

私は4年間、目標を立てて行動することを心がけてきました。1回生では「友達を増やす」、2回生では「立命館だからできることをする」という目標を掲げました。その両方を実現できたのが、オリター団での活動でした。3回生では「自分を磨く」と決め、副専攻としてフランス語を受講。さらに言語習得センター（CLA）のプログラムを受講し、英語の実力アップにも力を注ぎました。語学に加え、就職を見すえて通関士の資格も取得しました。現在は、「つながりを増やす」ことを目標に、JA（ジュニア・アドバイザー）として、3回生の就職を支援しています。目標を持ち、それに向かって努力してきたからこそ、充実した学生生活を過ごせたと実感しています。

特別プログラムを受講し小学校教諭を目指す

文学部4回生
小学校教諭（大阪市）内定
山本真康さん

私は、大学入学当初から教師を目指していたわけではありませんでした。教職課程を履修したのは「教員免許を持っていても損はないだろう」という気持ちから。2回生の時、中学校・高等学校に加えて小学校教諭の免許も取れるプログラムがあると知り、受講しました。気軽に始めたものの、勉強は非常に大変でした。日中は文学部の専門課程、夕方から夜9時頃までは教職課程と、授業を受けるだけで1日が終わってしまいました。3回生の春休み、学校ボランティアと学校インターンシップに参加し、小学校教師になるという決意を固めました。同じ目標を持ち、一緒に勉強する仲間がいたことで、苦しい時期を乗り越えることができました。

学部別懇談会 映像学部

完成年度を迎え、ますますコミュニケーションが活発な学部に成長

大森康宏学部長の挨拶でスタートした全体会。北野圭介副学部長は、「本年度で全学年が揃い、来年度には大学院修士課程が発足します。映像という表現文化を題材に、学生が教員や現場の方々と対話しながら学ぶ。そんな活気にあふれる学部に成長してきました」と、学部の歩みを報告しました。教学については、「映像表現だけでなく、ビジネスセンスを身につける学びも経験できるのが本学部の特長。また映像処理に関するデジタル技術を実践的に学習することもできます。学生の興味や活動は、映画、ゲーム、アニメーションだけでなく、携帯電話やインターネット業界、広告業界といった幅広い領域に広がっています」と述べました。

次いで、実践型授業として山田洋次監督の映画『京都太秦物語』の制作に携わる学生の姿を取り上げたテレビ番組が紹介されました。番組の中で山田監督は、「良い映画では、制作を支えたスタッフの熱い思いが観客に伝わります。映画制作を通してそれを学生に体験してほしかった。学生たちは実に意欲的に学んでくれました」と評価しました。

厳しい就職の現状報告においては、他学部にひけをとらない内定率を収めた学生の健闘を称えつつ、「エネルギーを持って前向きに人と交わり、厳しい交渉や調整にもひるまない。そうした企業や社会が求める人材を育成するため、学生が積極的かつ主体的にさまざまなことに取り組むようにサポートしています」と北野副学部長より、説明がありました。

2名の学生が学生生活と就職活動の状況について報告した後は、映像編集系とインタラクティブ系の教室を見学。最新の機材や充実した設備を見たご父母からは、感嘆の声があがりました。見学後は父母と教員の懇談会が行われました。

学生の体験談

学内外で得た知識や経験を就職活動にフルに活かす

映像学部4回生
株式会社エンターブレイン内定
長谷川あずさ さん

2回生の時に、「これからの映像学部の気風をつくるのは自分たちだ」という自覚が芽生え、オリターとして学生参画の授業プログラムや教材の企画構成に携わるようになりました。また、ゲーム研究会やゲーム制作サークルを設立したり、ゲームやアニメ、マンガを紹介するイベントに参加するなど、さまざまなことに挑戦しました。それらの経験から、「軽いフットワーク」「徹底した現場主義」「知識をどん欲に吸収し、新たなアイデアとしてアウトプットすること」などが身につきました。もちろん刺激し合える多くの仲間を得たことも、この学部で得た宝物です。就職活動では、企業や業界の情報を比較分析して、業界の抱える問題などを考察して臨むようにしました。その結果、5千人を超える応募者から、ただ1人内定を獲得。ウェブサービスを研究している視点から、出版業界が次世代多機能端末にどのように対応すべきかをビジネスを含めて客観的に分析思考したことが評価されたと思っています。

風通しの良い環境のなかで映像学部の学びを満喫

映像学部4回生
西日本電信通話株式会社内定
髙田さおり さん

先生との距離が近く、学生同士の情報交流も盛んな風通しの良い学習環境が本学部の魅力です。2回生のプロデュース実習では、松竹株式会社の映画『鴨川ホルモー』の販売グッズを企画。私たちのチームの企画案が見事採用されました。チームリーダーとしてみんなを引っ張りながら企画をまとめる中で、グループで協力する力やプレゼンテーション能力を磨くことができました。また博物館学芸員資格の取得に励んだり、友人の映像作品のエキストラや映写技士のアルバイトをするなど、学内外でさまざまなことに挑戦。早くから就職を意識してインターンシップにも参加しました。就職活動で大切なのは、いかに学生生活を充実させてきたかです。授業や課外活動など1つでも目標を持ってやり遂げたことがあれば、それが糧になります。本学部での経験は、映像業界にかかわらず、どんな業界からも高く評価されるものです。就職後は、学んだことを生かし、映像関連サービスの企画に携わりたいと思っています。

学部別懇談会 経済学部

専門性の高い学びを早期に始め、経験も語学力も積んだ人材を育成

全体会は、松原豊彦学部長の挨拶からスタートしました。「2006年より経済学科と国際経済学科の2学科制を導入し、ますますグローバル化する社会の中で必要とされる人材を送り出すことを目標に掲げています」と話し、それに伴うカリキュラムの改訂内容を説明しました。また「就職活動の面接で重要視されるのは、大学で何をしてきたか、どんな力を身につけてきたか、という点です。そのための基本は勉学、そして課外活動に全力投球すること」と続けました。

続いて紀國洋副学部長が学部教育の現状と展望を語りました。「哲学なのか科学なのか、文系なのか理系なのか—。さまざまな側面を持っているのが経済学です。人類を幸福にするためのシステムの構築に貢献できる力を身につけるため、本学では確固とした学問体系をつくっています。国内有数大学に並ぶ研究力と教員の質を誇り、その中で学生たちは広い範囲で基礎から応用まで学びます。また通常3回生から始まるゼミナールを、経済学部では2回生から開始。早い段階から専門性の高い学びを経験すること、ゼミ内の仲間と共同作業を積み重ね、コミュニケーション力を高めることは、就職にも生かせます」と報告。また特に高い力を習得してほしい英語の運用能力と専門学問の知識の習得状況については、卒業に必要な独自の条件を課しています。「英語で経済学を学ぶ科目もたくさん設定され、海外留学などの国際プログラムも充実しています」と語られました。

その後、キャリアデザインについての懇談会と、就職活動についてのより具体的な懇談会が別々に開かれました。

学生の体験談

自分を見直すきっかけをくれたキャリアデザインプロジェクト

経済学部2回生
山本泰希 さん

キャリアデザインとは、同じような業種や職種に興味を持つ学生がグループをつくり、グループごとにその業種について話し合いながら進める授業です。私は最初、「安定しているし、地元の公務員であれば両親も納得するだろう」という安易な考えから公務員を目指していました。けれど、授業の一環で滋賀県庁を訪問したことで、考えを改めました。県庁の方に「どこに行っても競争があり、働くためには働く目的や姿勢を持たなければいけない」、また別の方には簡潔に「働かなければ食べていけない」と言われたんです。親の仕送りで生活している私は、その当たり前のことがわかっていなかったと実感。もう1度進路について考え直しました。今は卒業までの2年で自分が目指す「自分像」に近づけるよう大学生活をもっと充実させようと考えています。それに気づかせてくれたこのプロジェクトに、とても感謝しています。

キャリアへの高い志しを持つ仲間が最大の収穫

経済学部4回生
生命保険会社内定
岡 峻大 さん

キャリアデザインプロジェクトで得た1番の収穫は、キャリアについて深く考える仲間に出会えたことです。私は当初、特に目的も持たずにこのプログラムを受講しました。けれど自分の将来と真摯に向き合う仲間たちの姿を見て、私自身もキャリアについて真剣に考えるようになりました。就職活動では、80社もの企業にエントリーシートを提出し、最終的に3社から内定をいただきました。来春から生命保険会社で働く予定です。活動中は、年代を問わず、できるだけさまざまな人と話をするようにし、自分の考え方を「自分ノート」に書き出すようにしていました。もちろん就職活動に全力投球したからと言って、誰もが内定をもらえる訳ではありません。でも全力投球しない人は決して内定を得られない。それが私の実感です。1・2回生にもたくさんの人との出会いを求めてほしいと思います。就職活動中はナーバスになることもあります。ご父母の皆さま、どうかお子さんの背中をやさしく押してあげてください。

学部別懇談会

経営学部

社会に出て10年後も活躍できる人材を育成するために

齋藤雅通学部長の挨拶から、全体会が始まりました。2015年の開校を目指し、大阪・茨木市に新たなキャンパスを設立する旨が発表され、「国際的にも通用する、高い教育を実践する大学を志しています。『10年後、立命館大学はどうあるべきか』という議論から生まれた取り組みの1つとして、今年度から新しいカリキュラムを編成しています」と述べられました。また就職については「社会に出て5年後、10年後も活躍できる人材育成を重要視しています。社内言語を英語にする企業も増えているため、経営学部では卒業条件としてTOEIC®における独自の基準を設け、高い語学力を育んで社会に送り出しています」と続けられました。

次に石崎祥之副学部長が、経営学部が目指す学生像について語りました。「与えられた仕事をこなすだけでなく、自分なりに工夫して、より良い方向に進めていける人材、すなわち、ビジネスを発見し、ビジネスを創造できる『ビジネスマン』として学生たちを世に送りだせるかが課題です」

続けて木下明浩研究科長が大学院進学状況について報告。「高い専門性を持って社会に貢献していく人材として、毎年大学院から約40名の学生を輩出しています。大学院では濃密できめ細かい授業により、学問の力が飛躍的に伸びます。かつては就職に不利とされていた大学院ですが、今はむしろそうした専門性が高く評価されています」と、説明しました。

最後に高橋博幸学生主事が、学生生活について報告。「経営学部生たちは総体的に真面目で、高い志を持っています」とし、学生の今後に期待を寄せました。

その後は学年別懇談会が開かれました。

学生の体験談

自分なりの目標と理念を持って就職活動に臨んだ

経営学部4回生
西日本旅客鉄道株式会社内定
浜根佑輔さん

3回生の8月に滋賀銀行の単位認定型インターンシップに参加し、社会人とはどういうものか、社会人として必要となる力が何か学びました。その後、学内外の企業説明会に参加。並行して、両親に自分の幼少期から話を聞いて自己分析を進め、自分にはどんな仕事が向いているのか考えました。エントリーシートはキャリアオフィスで何度も添削していただき、61社に提出しました。最終的に金融業界から4社、そしてJR西日本から内定をいただきました。就職活動を成功させるためには、自分なりの理念や目標を持つことが大切だと思います。私は「誰に話しても誇れる就職活動をする」という理念を持ち、「4月15日までに結果を出す」という目標を設定し、就職活動に臨みました。面接で話したことはメモを取ってデータ化することを心掛けました。おかげで話す内容がぶれなかったことが、企業から評価された点の1つだと思います。またゼミで学んだこと、課外活動で学業では得られない経験を積んだことも、就職活動で役立ちました。

さまざまな人と接し、新しい進路が見えてきた

経営学部4回生
株式会社ジーエス・ユアサ コーポレーション内定
富永佳乃さん

アルバイトでの接客を通じてお客様に喜んでいただくことにやりがいを感じ、「将来はより多くの人に笑顔を届けたい」との思いが膨らみました。最終的な進路は、消費者ニーズを満たす仕事ができる電気機器メーカー。とはいえ最初は、人の生命にかかわるところに魅力を感じ、食品メーカーを中心に就職活動を進めていました。第1希望の会社に落ちた時はとても落ち込みました。母が黙って見守ってくれたことが心の支えとなり、活動を続けることができました。現在内定をいただいた業界に視野を広げることができたのは、さまざまな人と接したからだと思います。自分だけで考えるのではなく、周りの人の意見にも耳を傾ければ、見えないことが見えてきます。また本学は就職支援も充実しています。多くのOB・OGが応援してくれるし、データベースも豊富です。それらを最大限に活用し、友達とも協力しながら内定をもらえるまで絶対に諦めず続けること。それが希望の進路をつかむ道だと思います。

学部別懇談会

理工学部

きめ細かい対応ができる教育の場を設け学生一人ひとりをサポート

まず坂根政男学部長が壇上に立ち、「立命館大学でしっかりとした学力を身につけて卒業してもらうことを目標にしています。」と前置きした後、理工学部での教育の取り組みを紹介しました。「私達のゴールは、一人ひとりの学生に『理工学部に来て良かった』『学力がついた』と実感してもらうこと。そのため1回生には教員が面接を行い、日々の授業の感想や不安を聞き出して教育の現場にフィードバックする仕組を、一部先行的に開始しています。専門科目では、TA（ティーチングアシスタント）と呼ばれる大学院生に授業をサポートしてもらい、きめ細かい授業を行っています。さらにていねいな指導を行うため、週に平均2～3回『物理駆け込み寺』、『数学学習相談会』という場を設定。数学や物理の理解を深めたいという学生や、より高度な学習を求める学生の相談に、教員やTAが応えています。今年は、前期だけで1,000名以上の学生が利用しました。」

また学部生の約4割が大学院に進学している現状を語り、「ご本人が希望されるのであれば、ぜひ大学院まで進んでほしい」と奨励。併せて今年度の理工学部生の就職活動の状況を報告し、「厳しい社会状況の中、学生はずいぶん頑張っています。」と評価しました。

次に在学生が学生生活や就職活動について体験談を報告。その後は学科別懇談会が催されました。

学生の体験談

経験の積み重ねと父親のサポートが助力に

理工学部4回生
ソニー株式会社内定
服部隼人さん

就職活動で応募した企業は、22社、最終的に5社から内定をいただきました。春からソニーで技術職として働く予定。カメラの設計などに携われればと思っています。この不況下で結果が出せたのには、父親のサポートが大きかったと思っています。小さい頃から父親には「勉強ばかりしているとバカになるぞ」と言われていました。一方で、「人間のベースづくりに勉強は絶対に必要だ」とも。一見相反するこれらの言葉は、人の話や本で聞きかじったことだけではなく、自分で見聞きした情報を信じ、身につけることが大切だという意味でした。そして、大学では「物理駆け込み寺」の学生スタッフや学内の図書館スタッフ、趣味の登山などさまざまな活動に挑戦しました。経験を積み重ね、私ならではの能力を磨いたことが、就職活動で発揮できたと思います。また、就職活動中も毎晩のように父と議論したことで、自分自身の長所や、本当は何が好きなのかに気づかせてもらいました。向き合ってくれた両親には本当に感謝しています。

自主的に行動することで成長できる場所

理工学研究科
博士課程前期課程2回生
亀谷大樹さん

学部では4回生から研究が始まりますが、卒業を機に離れてしまうのはもったいない、と思い大学院に進学しました。大学院では、学会で発表する機会が何度もあり、論理的で分かりやすい文章を書く訓練、限られた時間で相手を説得する訓練を積むことができました。これらは、いずれ就職活動でも必ず生かせる経験です。また周りに留学生が多く、毎日のコミュニケーションが英語なので、より洗練された英語を習得することができました。何より成長したのは、「考え方」です。研究に没頭する日々の中で、問題発見能力や解決能力を少しずつ養い、より柔軟で多面的な考え方ができるようになりました。大学院は、自分を成長させてくれるすばらしい場所です。反面、自主的に行動しなければ何も得ることはできません。もっと深く研究したい人、より多くの経験を積みたいという人には格好の機会です。ご父母の皆様も、もしお子さんが進学を希望したら、ぜひ応援してあげてください。

学部別懇談会 情報理工学部

英語・IT・異文化体験を網羅した国際化プログラムで、グローバルに活躍できる技術者を育成

立命館大学の全学部の中で就職内定率トップを維持している情報理工学部。まずは大久保英嗣学部長から、企業が求める人材像について語られました。躊躇しないで前に踏み出す力、失敗を恐れず、また失敗しても持続的に努力を積み重ねていく力、チームで働く力といった社会人基礎力は最低限必要であるとした上で、「外需で国を支えていく時代になっている中、重視されているのは、グローバルに活躍できる人材。そこで必要になるのが、外国語によるコミュニケーション能力と異文化理解力です。本学部では、英語研修とIT研修をセットにしたさまざまな留学プログラムを用意しています。参加後の学生生活は、勉学に対するモチベーションがアップするだけではなく、キャリア意識も高まっている様子が見られます。機会がありましたら、積極的に参加していただきたいと思います」と語りました。

続いて登壇した萩原啓副学部長からは、学部教育の現状について報告されました。「確固たる専門性、独創性を身につけた人材の育成」、「国際社会を舞台に活躍できる人材の育成」、「高いキャリア意識の醸成」「新しい科学技術を適切に生かせる人材の育成」の4つの教育目標について説明された後、「大規模なシステムから個人の生活にいたるすべてにおいて、情報技術が重要になってきており、まだまだこれから伸びていく分野です。その第一線で活躍できる人材を輩出していきたいと考えています」と締めくくられました。

最後に2名の在学生が、学生生活や就職活動に関する体験談を報告し、その後は学科別懇談会が行われました。

学生の体験談

大学院だからこそ身につけられる能力があります

理工学部研究科
博士課程前期課程1回生
山本亜衣子さん

情報理工学専攻人間情報科学コースで、比喩表現の自動認識について研究しています。情報理工学部の大学院進学率は約4割。大学院進学が当たり前になりつつあることを感じています。大学院とは、学者を養成する機関であると同時に、即戦力となる人材を育成する機関です。その大きな魅力の1つは、研究活動を通じて高い専門性を獲得できるだけではなく、さまざまな経験も積めることにあります。国内外の学会での発表、他大学との合同ゼミ、産官学提携プロジェクト、国際化プログラム、海外でのインターンなど、活動の場は多岐にわたり、その中で、学部では培えなかった幅広い能力が身につきました。英語力、論理的思考力、問題解決能力の他、特にコミュニケーション能力、ディスカッション能力といった発信する力が向上したように思います。学部生時代の私と比べて、今の私ははるかに魅力的。大学院に進学して本当によかったと感じています。

課外活動で培ったヒューマンスキルがカギに

情報理工学部4回生
株式会社NTTデータ内定
本郷佑一さん

就職活動を開始したのは3年生の5月。どの業界で何をしたいのかが分からず、あらゆる業界・職種の説明会やセミナーに100回以上足を運びました。11月頃から何がやりたいのかを真剣に考え始め、IT系のSE職に就きたいという目標をやっとの思いで見出せたのは1月でした。29社にエントリーし、第1志望から内定をいただくことができました。業界を絞るのが遅かったり、テスト対策が間に合わなかったりと反省点はいろいろありますがそれでも納得のいく結果が出せたのは、早くに動き始めたからだと思います。また、アルバイトやインターンで多くの大人とコミュニケーションをとっていたこと、サークルやボランティア団体に所属し、チームで取り組み何かをつくりあげる経験をしていたことが、ヒューマンスキルを磨くことにつながったようにも感じています。勉強だけを頑張るのではなく、課外活動を通じて人間的に成長することの大切さを実感しました。

学部別懇談会 生命科学部・薬学部

人類の未来の鍵となるライフサイエンスを創造し、社会が要請する、国際的に活躍できる人材を育成

冒頭では、両学部長が登壇。谷口吉弘生命科学部長は、開設されて2年半が経過し、3回生が本格的な専門課程に入ったことを報告した上で、「高齢化が急速に進んでいる日本においては、ライフサイエンスを学んだ人材の活躍がなければ社会の発展はあり得ないでしょう。新聞には毎日のように関連記事が掲載されていますが、そうした人材の活躍の場が控えているということだとご理解ください。就職活動に際しては、学部・学科をあげて万全の態勢で支援したいと考えています」と述べました。北 泰行薬学部長は、施設のさらなる充実や薬剤師経験を持つ教員の増員に着手している現状と、今後の時代における英語力の重要性に触れ、「21世紀の医療において、ライフサイエンスは非常に重要だと位置づけられています。日本でもトップクラスの薬学を目指し、病院、企業、研究所などあらゆる領域へ卒業生を送り出したい」と、その展望を語りました。

引き続き、岡田豊生命科学部副学部長が、学びと進路ということで、生命科学部、薬学部の教育目標、各学科の特徴やカリキュラムについて説明しました。また、学部として力を入れている英語教育について、学生自身がテーマを設定・発信するProjectsとスキルを磨くSkillWorkshopsからなるプログラムの解説を行いました。続いて、1・2回生から実施されるキャリアセミナーや薬学部の1回生が病院、薬局、製薬会社を見学する早期体験など、将来を見据えた支援体制を紹介しました。

最後に、学生3名が、学校生活、英語教育、進路・就職をテーマに体験談を報告。英語によるプレゼンテーションも披露され、会場は盛大な拍手に包まれました。その後は、個別相談会が行われました。

学生の体験談

日々の積み重ねを最優先しながら、課題活動にも参加

薬学部1回生
池田剛久さん

幼少期の頃から病院に通う機会が多く、薬に興味を抱いていたため、薬学部への進学を決意しました。9～18時まで授業があり、課題やレポートもほぼ毎日課せられるので、野球サークルやアルバイトは勉強に影響がない程度に調整しています。前期の早期体験学習では病院、薬局、製薬会社を訪問し、それぞれの仕事内容、特徴、求められる能力などを知ることができ、とても有意義でした。目下の目標は、5回生にあがる際の薬学共用試験に合格することです。両親への感謝の気持ちを忘れず、日々の勉強を大切に積み重ねながら、自分から積極的にいろいろなことに挑戦して、将来の進路をじっくり考えたいと思っています。

充実の英語教育で、総合的な英語力を培えました

生命科学部3回生
奥田華朱美さん

入学してこれまでとは全く違う学習スタイルの英語教育に驚きました。3回生のProjectsは、少人数グループで英語の論文を読み、関連するテーマを設定し、その考察を発表するという内容です。日本における麦栽培の普及をテーマに発表を行いました。発表に加え、半期ごとに英語でレポートにまとめる必要があり、その上Skill Workshopsでも課題が出されるなどハードでした。その中でプレゼンテーションスキル、コミュニケーションスキルを習得できたほか、グループワークを通していかに円滑に話を進めるか、相手からアイデアを引き出すにはどうすればいいかも学べたと思います。1回生のときに465点だったTOEIC®も、630点まで伸ばすことができました。

大学院で得た専門性と思考力で研究職に内定

理工学研究科
博士課程前期課程2回生
花王株式会社内定
川本康一さん

3回生の時に有機化学の授業で「化学で人の命が救えるんだ」と衝撃を受け、製薬の研究職を目指すようになりました。4回生で配属された研究室は有機化学ではありませんでしたが、学びたい有機化学で、より高度な知識・技術を身につけたいと大学院に進学しました。志望していた製薬・化学系企業の研究職は、募集の段階で修士以上が最低条件となるケースが大半です。研究のプロセスで求められる確かな専門性と高度な思考力は、大学院での日々の研究、文献講読、学会発表などを通してこそ得られるものだと思います。改めて感じるのは、薬学や化学といった生体化学系の研究職の場合、大学院進学が必須だということです。

学部別懇談会

スポーツ健康科学部

総合的・学際的にスポーツと健康にアプローチし、最前線でしか学べない「生きた知識」を身につける

2010年4月に開設されたばかりのスポーツ健康科学部。全体会は、田畑泉学部長の「この学部の良いところは、歩いていると、『おはよう』『こんにちは』といった挨拶が聞こえてくるところです。企画のなかで学生たちと一緒に朝ご飯を食べる機会を持ち、それぞれの思いを聞くこともできました。すばらしい施設・設備が整い、皆様のお子様は1番いい時に入学したといえますが、その反面、前例がないといった1期生ならではの大変さもあることでしょう。これからも将来を見据えて頑張ってほしいと思います」という挨拶でスタートしました。

続いて伊坂忠夫副学部長は、「本学部は、学部生229名、大学院生26名で発足しました。様々な課題にチャレンジしながら社会の要請に応える優秀な人材を育成し、日本一の学部を目標に進めています」と力強く語りました。8つの領域で構成された教員の高い教育力・研究力、最先端の施設・設備を活用した実践的教育、総合大学ならではの学部間連携を特徴とした総合的・学際的な学びの中で、教学理念である「グローバルな視野とリーダーシップを備えた、社会の発展に貢献する人材の育成」を強調。自然科学と社会科学の領域を越えた学びとリテラシーの徹底、4年間の小集団教育、国際的に活躍できる英語運用能力とコミュニケーション能力を育む「プロジェクト発信型英語プログラム」など、カリキュラムの特徴について説明しました。また多彩なキャリア教育や幅広い進路についても触れ、「基礎力、専門性、人間力を備えられる、宇宙飛行士に1番近い学部」であると述べました。

小沢道紀学生主事、および1回生の野田憲太郎さんによる学生生活の実態についての報告に続いて、質問コーナーが設けられ、野田さんに加えて同じく1回生の下崎陽平さんが回答しました。父母からの「課題で忙しそうだが、ついていけているのか?」という質問には、「先生が質問に丁寧に対応してくれるので大丈夫です」（下崎さん）と回答され、父母は安堵の表情を浮かべていました。その後、2名の学生の案内で、最新機器を備えた「スポーツパフォーマンス測定室」、体内の状態や脳内の働きを調べることができる「MRシステム」などの施設を見学しました。その後全体会に引き続き、個別相談会が催されました。

スポーツ健康科学部
1回生
下崎陽平さん

学生の体験談

スポーツ健康科学部
1回生
野田憲太郎さん

社会に通用するスキルと人間的成長を得られる場 スポーツ健康科学部

ずっとサッカーをやっていて、スポーツに興味を持っていました。この学部を志望したのは、スポーツを学問として多角的にとらえ、勉強できること、進路の選択肢が幅広いことに惹かれたからです。学部の雰囲気が良く、仲間ともいい関係を築けているので居心地がいいですし、施設も含め、とても恵まれた環境であることを実感しています。入学して学んだことは、自分で行動することの大切さです。この場にこうして立っているのも、積極的に先生方や職員の方とコミュニケーションをとった結果だと感じています。また、プロジェクト発信型英語プログラムの授業を通して、プレゼンテーション力を身につけられたことも大きな変化です。今後は、英語力アップや資格取得などの目標を設定し、授業の空き時間も自分の将来にプラスになるように使い、成果を挙げられるよう頑張ります。また、これからもスポーツ健康科学部のすばらしさをアピールしていきたいと思っています。

施設見学

スポーツパフォーマンス測定室にて

栄養調理実習室にて

Parents' Voices

秋のオープンカレッジに参加された父母の皆さまにお伺いしました

衣笠

「立命館大学ほど良い大学はない」と言う息子ですが、親にはコメや薬を送ってくれという連絡しかありません。そんな息子の学生生活や、現代の学生気質について知りたいと思い、学生生活講演会に参加。お話を聞いて、最近の若者の社会的欲求力や仲間意識が希薄な理由がよくわかりました。また、講師が子どもの学ぶ産業社会学部の先生だったので、このような先生に、日頃から接していただけることは有難いと思いました。

永戸さん ご夫妻
産業社会学部2回生の父母

衣笠

映像学部は新しい学部なので、進路・就職についてはよくわからないというのが正直なところ。しかも、当の本人がのんびり構えているので不安に思い、進路・就職講演会に参加しました。学部別懇談会では、立派な施設を案内していただきましたが、文系の息子が使いこなせているのだろうかと、少し心配になりました。就職だけでなく、大学院や留学も視野に入れていますが、どこまで親が子どもの進路に口を出していいのか悩むところですね。

辻川さん
映像学部3回生の母

BKC

大学3回生の娘は、まさに今、就職活動の最中です。娘の現状を把握するために進路・就職講演会に参加しました。やはり全体的に厳しいようですが、立命館大学は関西の私大の中でも就職者数が多く、フォローもしっかりしてくださっているので、その点は安心しています。今は大きな挫折を経験したことのない娘ですが、今後壁にぶつかった時に相談しやすいよう、上手くコミュニケーションを取りながら接していきたいと思います。

濱野さん ご夫妻
経済学部3回生の父母

BKC

大学での教育はどのようなものか、息子が日々どのようなことに取り組んでいるのかを知るいい機会なので、前回に引き続き参加しました。今回はサポート体制についての話を聞き、4年間を通じて、就職に向けてステップを踏めるように支援をしてもらえることが分かり安心しました。就職以外のサポート内容も把握できたので、必要になった時には教えてやれると思います。

西村さん ご夫妻
理工学部1回生の父母

委員懇談会

秋のオープンカレッジ開催当日12時より、両キャンパスにおいて2010年度委員懇談会が開催され、全国から87名の父母委員と総長以下大学選出役員29名、オブザーバー2名が参加しました。

はじめに川口総長が大学代表として挨拶され、日頃の父母教育後援会活動と大学への支援についての御礼と、2015年に茨木新キャンパス開設を目指すことにともなう3キャンパス整備等について説明されました。続いて、千宗室会長が父母教育後援会代表として、全国から参加の父母委員に日頃の活動に対する感謝と、今後、より一層大学・学生のために父母教育後援会活動を推進していく旨が述べられました。衣笠キャンパスとびわこ・くさつキャンパス、それぞれに出席している大学選出役員の紹介後、石井幹事長より会務報告がおこなわれ、両キャンパスのテレビ会議は終了しました。

その後、衣笠キャンパスは馬場監事、びわこ・くさつキャンパスは今西副会長が司会を務め、各キャンパスで懇談をおこないました。両キャンパスで、父母委員から進路・就職に関する意見と質問があり、それぞれ大学選出役員が回答しました。

次第：
1）大学代表挨拶：川口清史 総長（父母教育後援会名誉会長）
2）父母教育後援会代表挨拶：千　宗室（父母教育後援会会長）
3）大学選出役員紹介：衣笠・上田　寛 副総長（父母教育後援会副会長）
BKC・飯田健夫 副総長（父母教育後援会副会長）
4）会務報告：石井秀則 教学部長（父母教育後援会幹事長）
5）懇談

※1）～4）はテレビ会議で実施。5）は各キャンパスに分かれて実施。

アカデミック京都ウオッチング

Academic Kyoto Watching

立命館大学の教員をはじめ、専門家の解説を受けながら、単なる名所観光とは一味違った京都を楽しめると毎年大変ご好評をいただいているアカデミック京都ウオッチング。
今回は2010年11月21日(日)、15のコースを設定して開催しました。
幸い好天に恵まれた当日。参加された方々は、古都の風情を彷彿とさせる朱雀、衣笠の両キャンパスを出発し、錦秋の京都を満喫しました。

各コースのご案内

京都歴史回廊協議会特選コース

坂本龍馬の幕末京都を歩く

講師：木村武仁先生

NHK大河ドラマで注目を浴びている坂本龍馬の実像に迫るコース。龍馬の墓地や寺田屋、二条城など歴史の舞台となった場所を訪ね歩きました。

京都魔界巡礼
～京の冥界を逍遥する・小野篁冥官伝説紀行～

講師：丘 眞奈美先生

平安時代、現世と冥界を往来する神通力を持ったといわれる小野篁ゆかりの史跡を探訪。六道珍皇寺では等身大の小野篁像や非公開寺宝を拝見しました。

本学教員と京の歴史・文化・街を訪ねるコース

理工学部山崎先生と歩く
ー嵯峨野の歴史的風景

歴史、文学、謡曲、歌の舞台となった嵯峨野を散策。仏野念仏寺、二尊院、落柿舎、野宮神社、天龍寺などを訪れ、嵯峨野の人文的風景を味わいました。

文学部中西先生と訪ねる「紫女清女縁遍歴」

平安王朝の雅を感じながら都大路を皮切りに現代の京都を大周りして宇治へ。紫式部の墓所、平安神宮の庭園、泉湧寺、宇治陵などを見学しました。

文学部瀧本先生と散策する
ー森鷗外『高瀬舟』の世界ー

森鷗外の名作『高瀬舟』の世界に浸りながら、高瀬川の流れる二条木屋町を散策。名庭第二無鄰菴、伏見の酒蔵などを登場人物と同じ目線で眺めました。

文学部三枝先生と訪ねる「古都」京都の誕生
～京都の近代化について考える～

「古都」京都が近代、どのような変遷を遂げたのか、川端康成の名著『古都』の世界と重ねながら、南禅寺や琵琶湖疎水などをたどりました。

文学部佐古先生と訪ねる
～『今昔物語集』に描かれた平安京～

殺人や犯罪が横行し、鬼神が徘徊したとされる平安京のミステリアスな側面を垣間見るコース。芥川龍之介の『羅生門』で知られる東寺も見学しました。

文学部井上先生とながめる京の庭園

中世から近代までの美しい庭園6箇所を観覧。江戸初期の天才小堀遠州の手による枯山水や、「造園王」と謳われた小川治兵衛の代表作などを眺めました。

文学部桃崎有一郎先生と歩く
室町京都のタイムカプセル“西陣”
ー続・現代京都の源流

西陣にゆかりの深い神社仏閣を探訪。織物の町“西陣”の成立に凝縮された、文化・産業、そして欲望が織りなす京都の歴史を追体験しました。

古都の伝統・文化にふれあうコース

京都 再発見の旅

京都観光の中でも特に人気の高いスポットにご案内。清水寺、知恩院、伏見稲荷大社などを訪れ、昼食は「清水順正おかべ家」で京料理を堪能しました。

京の仏像探訪

仏像にまつわる講話を聴きながら、京都に安置される有名な仏像を拝観。三十三間堂の千手観音坐像、広隆寺の弥勒菩薩半跏像などの国宝を拝みました。

きぬかけの路をたずねて

平安京朱雀大路跡にある立命館朱雀キャンパスをスタートし、立命館大学周辺の古刹を訪ねました。龍安寺の石庭など見どころ満載の一日となりました。

京の美味なる出会いと世界文化遺産をめぐる
～ミシュラン岡崎つる家～

世界遺産に登録されている京都の文化財をめぐり、2009年関西版「ミシュラン」で最高評価の三ツ星を獲得した「岡崎つる家」の料理に舌鼓を打ちました。

「能」幽玄の世界へのいざない
～冬青庵能舞台鑑賞～

「能楽おもしろ講座」を主宰する講師に手ほどきを受けながら、現存する最古の能舞台の見学、能の実演鑑賞などを通して本物の能を体験しました。

京文化「おもてなし」を学ぶ
～お座敷舞妓体験～

「もてなす心」を大切にする祇園に着目。角屋もてなしの文化美術館や八坂神社、建仁寺を訪ねた他、実際にお座敷舞妓体験も楽しみました。

文学部 瀧本先生と散策する
ー森鷗外『高瀬舟』の世界ー

京都市中を流れる高瀬川を舞台に繰り広げられる森鷗外の名作『高瀬舟』。
ミニ講義で解説された作品のテーマやその背景、登場人物の心情に思いを馳せながら、紅葉に染まるゆかりの地を訪ねました。

コース：高瀬川 ▶ 昼食（第二無鄰菴） ▶ 無鄰菴 ▶ 伏見三十石船 ▶ 月桂冠大倉記念館

『高瀬舟』に込められたメッセージを読み解くカギとなる名庭・第二無鄰菴へ

ご父母が最初に訪れたのは、高瀬川が流れる木屋町二条。京の情緒をゆったりと味わいながら鴨川まで足を伸ばし、秋晴れの暖かな日差しと美しい紅葉に包まれて散策を楽しみました。

続いて、名庭・第二無鄰菴を擁する豪商角倉了以の別邸跡「がんこ高瀬川二条苑」へ。見事な日本庭園を眺めながら会席料理を味わいました。

高瀬川の源流でもあるこの庭は、後に明治の元勲山県有朋が所有したことでも知られています。「大きな権力を振るった人物が、高瀬川の上流に位置している。このことを念頭に置いておくと、『高瀬舟』がより立体的に見えてきます」。そう語る瀧本先生の言葉を心にとどめつつ、京都に建てられたもう一つの山県別邸、無鄰菴へと向かいました。

作品の世界に浸りながら、鮮やかに色づいた日本庭園と明治期を代表する近代建築を見学

無鄰菴に到着したご父母は、近代日本庭園の嚆矢ともいわれる名庭を一望できるお座敷で、抹茶と茶菓子をいただきました。

この無鄰菴の敷地内には、日露戦争開戦前に「無鄰菴会議」が開かれたことでも有名な煉瓦造りの洋館があります。参加者の方々は、山県有朋の絶大な権力を彷彿させる重厚な空間に身を置き、第二無鄰菴での瀧本先生の言葉と、ミニ講義で語られた作品の背景を改めて思い起こしていました。財力・権力の象徴ともいえる上流から、当時貧しい人々が多く暮らした下流へと向かう物語に、鷗外は社会のあり方を重ね合わせていたのではないか―作品の世界に思いをめぐらす、意義深いひとときとなりました。

登場人物と同じ目線で秋の京都と作品の醍醐味を堪能

続いて向かった高瀬川の下流では、伏見三十石船に乗り、作品の登場人物と同じ低い目線から、京都の街を眺めました。のどかな風景、水面に映し出される紅葉。市街地とは異なる雰囲気の中、船上はしばし心地よい静寂に包まれました。

最後に立ち寄ったのは「月桂冠大倉記念館」。ご父母は、40年前の名酒を復刻したという吟醸酒などの試飲を楽しみながら、その深い味わいと、『高瀬舟』の世界の余韻に酔いしれました。

ミニ講義

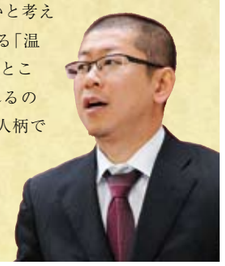
龍馬・岩崎弥太郎と龍馬伝から龍馬の実像に迫る

講師：木村武仁 先生（霊山歴史館 主任学芸員）

2010年のNHK大河ドラマで取り上げられ、坂本龍馬が再び脚光を浴びています。その偉業とともに、虚実入り混じった伝説の残る龍馬。数々のエピソードの真偽はどうだったのかを解き明かしながら、本当の龍馬像に迫りたいと思います。

まず龍馬が成し遂げた偉業の中でもとりわけ歴史的に重大な意味をもつものとして、「薩長同盟」「船中八策」「大政奉還」が挙げられます。一介の脱藩浪士に過ぎない龍馬が、後の日本の礎を築く大仕事をやってのけた裏には、龍馬ならではの人脈や才気がありました。たとえば薩長同盟の締結の際、実は龍馬以前に中岡慎太郎や筑前の勤王党も画策に動いていました。しかし龍馬は、政治的にだけではなく、亀山社中を通して武器と兵糧を互いに商いするという商業をもって薩長を結びつけ、同盟を成功させたのでした。

また明治15年頃までは、坂本龍馬の名は一般にはほとんど知られていませんでした。ところが坂崎紫瀾が龍馬の伝記を書いたこと、また明治天皇の皇后・昭憲皇太后の枕元に龍馬が出てきたという逸話から明治中期から後期にかけて、龍馬ブームが到来。一気に国民的ヒーローとなったのでした。それ以降、龍馬にまつわる語り草は枚挙にいとまがありません。その一つ、龍馬が剣の達人だったというのは、今では疑わしいと考えられています。一方龍馬を知る人物による「温厚で嫌味がない」「赤子のように愛すべきところがあった」といった証言から感じられるのは、人を惹きつけて離さなかった龍馬の人柄です。坂本龍馬は、その志と愛すべき魅力によってたくさんの人々の協力を獲得した結果、数々の偉業を成し得たのです。



坂本龍馬の幕末京都を歩く

幕末、坂本龍馬ら志士たちや新選組隊士が闊歩した京都。今も市街には維新の足跡がいくつも残っています。
このコースでは、霊山歴史館学芸員の木村武仁先生の解説のもと、幕末の歴史の舞台をめぐりつつ、
2010年のNHK大河ドラマで新たな光が当てられた坂本龍馬の実像を追いかけました。
秋晴れの下、朱に染まる京都を愛でながらの心躍る道程となりました。

コース：霊山歴史館 講義・見学 ▶ 霊山墓地 ▶ 昼　食 ▶ 二条城 ▶ 寺田屋 ▶ 寺田屋 登勢の墓 ▶ 大黒寺

幕末維新の資料を展示した博物館、龍馬の墓地で龍馬の息づかいを感じる

坂本龍馬の足跡をたどる一日の始まりは、わが国で唯一幕末維新を専門としたミュージアム霊山歴史館から。歴史館の主任学芸員である木村武仁先生によるミニ講義で幕末の社会情勢や龍馬にかかわる知識を得て、想像力を膨らませた後、木村先生に案内されながら、博物館内を見学しました。歴史的にも価値の高い資料約5000点を収蔵する同博物館。体毛まで緻密に再現したシリコンゴム製の等身大の龍馬像や展示された写真から、龍馬をはじめ、中岡慎太郎、木戸孝允、新選組の面々など幕末の志士たちの姿を確かめました。また龍馬暗殺に使われたと伝わる刀、高杉晋作が龍馬に贈った洋式銃と同型のスミス&ウェッソン社製の銃、龍馬が海援隊士で甥の高松太郎に宛てた手紙や、殺される直前、同志の岡本健三郎に宛てたものなど龍馬直筆の手紙3通を見学し、当時を思い起こさせる品々に目を凝らしました。館内には池田屋事件をリアルに再現した模型も展示されており、建物の構造や襲撃の一部始終をつぶさに眺めることができました。

続いて一行は、博物館の向かいにある幕末志士達の墓所を参拝しました。墓所には坂本龍馬、中岡慎太郎の他、桂小五郎、「池田屋事件」や「禁門の変」などで命を落とした志士たちが眠ります。石の階段を上り、ひときわ見晴らしのいい場所に坂本龍馬、中岡慎太郎の墓が並んでいました。頭上は鮮やかに色づき始めた紅葉、眼下には京都市街を一望でき、参加者たちは墓に手を合わせつつ、見事な眺望に見入っていました。

昼食は、霊山歴史館のすぐそばにあるホテルりょうぜんにて。湯どうふをはじめ、季節の彩りにあふれた会席料理を味わいました。

大政奉還の舞台・二条城の絢爛豪華な造りに見惚れ、庭園散策を楽しむ

昼食後、向かったのは二条城です。この城は、1603年、徳川家康が京都御所の守護と将軍上洛の際の宿泊所として造営。伏見城の遺構を移すなどして三代将軍家光の治世に完成したもので、現在は世界遺産に登録されています。幕末においては、1867年、十五代将軍徳川慶喜によって大政奉還がなされた場所として歴史に名を刻んでいます。

一行は、国宝に指定されている二の丸御殿を見学しました。桃山時代の武家風書院造りで、車寄せに遠侍（とおさむらい）、式台（しきだい）、大広間（おおひろま）、蘇鉄の間（そてつのま）、黒書院（くろしょいん）、白書院（しろしょいん）の6棟が立ち並びます。金箔が貼りつけられた背景に、見事な枝ぶりの松が描かれた襖絵や、壁、欄間、天井にまで装飾が施された絢爛豪華な造りは目を奪うばかり。中でも特に格式の高い大広間・一の間、二の間で大政奉還が行われたことが説明されました。さらに特別名勝二の丸庭園へ。暖かな秋の日差しの下、雄大な造りの名庭を眺めながら、散策を楽しみました。

寺田屋、伏見の薩摩藩邸跡、登勢の墓所を訪れ、寺田屋龍馬襲撃事件の足跡をたどる

その後はいよいよ龍馬伝のクライマックスの一つ、寺田屋龍馬襲撃事件の舞台へ。残念ながら寺田屋は鳥羽・伏見の戦いの際に焼失したため、現在の建物は明治後期に再建されたものです。とはいえ外観や建物の構造は、龍馬が常宿とした船宿の風情を十分に伝えています。龍馬が伏見奉行の捕方に囲まれ、負傷した様子を彷彿とさせる室内や、龍馬の妻お龍が龍馬に急を告げた際に入っていた風呂などが再現され、一行は興味深く見学しました。

さらに寺田屋から十数分歩いたところにある松林院墓地と大黒寺へ。龍馬に母と慕われた、寺田屋の女将登勢の墓に参りました。また龍馬が襲われた4年前、1862年に薩摩藩の尊王派が鎮圧された寺田屋騒動の犠牲者は大黒寺に葬られています。参加者は、西郷隆盛の手とされる繊細で達筆な字で銘が刻まれた墓碑を見ながら、機知に富む木村先生の解説に耳を傾けました。

最後に寺田屋龍馬襲撃事件の際、お龍が助けを請いに駆け込んだ薩摩藩伏見藩邸跡を訪問。龍馬が駆け抜けた幕末の京都をたどる旅を終えたのでした。

衣笠キャンパス

石原ゼミ（政策科学部）

石原ゼミ　政策科学部　石原一彦教授　ゼミテーマ：持続可能な都市形成とまちづくり

学生自ら京都市街に足を運び、調査する実証研究を重視する石原ゼミ。持続可能な都市形成やまちづくりを実践的に考えるゼミの学びに同行しました。

ゼミ紹介

理論だけでなく、まちへ出て実態を調査

政策科学部3回生　佐藤広大さん

石原ゼミでは、まちづくり、住環境、都市計画などにかかわるテーマを中心に研究しています。このゼミの特徴は、ゼミ生それぞれが自分の研究テーマについて具体的なフィールドをもち、理論だけでなく、実際にまちに出て調査するなど、フィールドワークを積極的に行うことができる点です。普通の大学の講義などは座学が中心ですが、石原ゼミでは石原教授が多くの研究フィールドをもっておられるので、フィールドワークを行いやすい環境が整っています。

まちに出て調査すると、自分たちで考えているだけでは気づかないような発見をしたり、まちの人から意外な意見をお聞きしたり、貴重な経験を積むことができます。

私達のグループでは、木屋町を研究フィールドにしています。現在の木屋町は、訪れる人も少なくなり、まちとしての賑わいがなくなっていることに問題意識をもち、「木屋町の歴史的資源の活用による木屋町のイメージ向上の方策と活性化の可能性」というテーマで研究を行っています。

木屋町の現状を知るために住民の方々の会議に参加したり、夏に行われる祭りに参加してアンケートをとったりしながら研究を進めています。先日は、そのアンケート結果を木屋町や高瀬川にかかわる方々に発表する機会も与えていただきました。皆様から感想や意見をいただくこともでき、非常に有意義な経験になりました。

「現場を知る」をモットーに、実際のまちを見て課題を肌で実感する

まちを歩きながら石原教授の講義は続く

情緒あふれる高瀬川が流れる木屋町でのフィールドワーク

Schedule

3回生

2010.4	グループに分かれて研究テーマ設定
2010.5	活動計画立案
2010.8～	アンケート調査
2010.9	ゼミ旅行兼フィールドワーク、調査結果の分析、研究
2010.11	PSエキスポ（学部ゼミナール大会）発表
2011.1	ゼミレポート提出

Interview

調査をもとに望ましいまちのあり方を分析・提案

私の研究テーマは、住宅地計画からまちづくりまで、「居住」に関わること。ゼミではとりわけ都市の成熟化や自律的な都市環境を実現するにはどうしたらいいかという視点から、持続可能な都市のあり方を模索しています。具体的には私が提示する研究フィールドに関連して「木屋町・先斗町・立誠学地区の研究」、「堀川団地再生」、「日本および諸外国のアスベスト問題研究」という3つのテーマを設定。学生たちはグループに分かれて研究に取り組んでいます。

立誠学区（四条～三条、鴨川～寺町のエリア）では、木屋町班と先斗町班が活動しています。木屋町では、近年来街者が減少し、街の活気が損なわれてきています。京都の繁華街としての復権が求められています。また、先斗町は、古くから花街として栄え、お茶屋を中心とした情緒豊かな界隈でした。ところが近年、客引きが当たり前になり、また店先にメニューなどを陳列したり、派手な看板を設置するなど、先斗町らしい風情が失われつつあります。地域の方々もこうした実態に危機感をもち、まちづくり活動を行っています。学生たちはそうした地域の方々とコミュニケーションをとりながら、店舗の主や訪れるお客さんへのアンケート調査を実施。望ましいまちのあり方や活性化の方法を模索し、地域に提案しています。

堀川団地再生班やアスベスト対策研究班もそれぞれ当事者へのアンケート調査をはじめとしたフィールドワークを通して、堀川商店街の再生、あるいはアスベスト被害の実態解明と除去対策の道筋を探っています。

多様な学問領域を融合させる政策科学部らしい研究

これまでの都市計画は、都市への人口集中や都市圏の拡大といった問題に対応する都市化政策が中心でした。しかし経済成長が鈍化し、「右肩下がり」の時代といわれる今後は、これから将来にわたって持続的に都市環境をマネジメントしていくようなまちづくりが必要です。

「居住」に関心をもち、望ましい住宅地のあり方を考えたのが、私の研究の出発点。その中で、まちづくりや都市で起こるさまざまな問題にも目を向けてきました。

まちづくりや都市計画は、異なる分野のスペシャリストが集まり、意見を出し合いながら進められます。さまざまな専門領域を理解し、調整していくところに難しさとおもしろさがあります。多様な学問領域を融合させる、まさに政策科学部らしい研究領域といえます。

「現場を知れ」。その中で問題解決能力が培われる

学生にいつも説いているのは、「現場を知れ」ということ。週1回のゼミで研究計画や進捗状況を話し合い、それを元に学生は、それぞれの研究対象地域でアンケート調査を実施、調査結果を分析します。調査では、地域の人に協力を仰いだり、さまざまな人の意見を聞きながら課題を解決していかなければなりません。

年齢も、立場も異なる大人と折衝する機会も数多くあります。そうした人々に「もまれる」中でコミュニケーション能力が鍛えられ、論理的に問題を解決していける力も身についていきます。こうした能力は、実社会に出てからもきっとさまざまな場面で生かせるはずです。

Profile

石原一彦（いしはら かずひこ）

政策科学部教授

1990年京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程を単位取得退学。（株）市浦都市開発建築コンサルタンツ［現（株）市浦ハウジング＆プランニング］に勤務し、住宅マスタープラン、密集市街地住環境整備計画などの業務に従事。2004年現職に着任。一級建築士、技術士（都市および地方計画）。

Student's Voice

「アスベストって何？」からスタートし聞き取り調査や文献研究で実態を知る

政策科学部 3回生　榊原圭介さん

「アスベストって何なん？」。私たちアスベスト班の研究は、そんな疑問からのスタートでした。最初は先生方による報告会を聞きに行きましたが、話をまったく理解できず、私たちに何ができるのか、想像もつきませんでした。けれど実際に東京や京都のアスベスト被害者の方に聞き取り調査をしたり、文献調査を続ける中で、現在の日本の建築物に使われているアスベストの対策に問題があることがわかってきました。アスベストの実態がわかりはじめた今、私たちにできることは、アスベスト問題をより深く知り、多くの人に伝えることだと考えています。

Student's Voice

人とのつながりの大切さを実感したアンケート調査

政策科学部 3回生　髙尾知世さん

歴史的な花街である先斗町では、現在、屋外広告物の増加や客引きが横行し、いずれ風情が損なわれるのではないかと危惧されています。私たち先斗町班は、利用客と店舗経営者を対象に、これらの問題に関する意識調査を2ヶ月にわたって行いました。アンケート調査は想像以上に大変でした。足を運んでも店が閉まっていたり、調査を断られたりすることも多々ありました。より多くの協力を得るためには町内会の方と連携をとったり、同じ店を何度も訪ねる必要がありました。人とのつながりや、相手の立場になった調査を行うことの大切さを実感した経験でした。

編集後記

「現場」を何より重視する石原ゼミ。現場に足を運び、自らの目と耳で問題を見つけ、解決することで実践的な力を培っていく。時には、ゼミ生を連れて全員で地域のフィールドワークに出かけたり、ゼミ旅行を兼ねて全国各地にもフィールド調査に赴く。地域のまちづくりや活性化に尽力する石原教授のエネルギッシュで温かいまなざしが、ゼミ外の時間にも就職相談を受けるなど学生にも慕われている理由だ。

BKC 日下ゼミ（理工学部）

日下ゼミ　理工学部　日下貴之教授　ゼミテーマ：複合材料の破壊特性

日下ゼミでは、先進の複合材料の構造や強度、破壊特性などを実験・解析しています。自動車や航空機などに応用される研究だけに、ゼミにも学生たちのやる気、熱気が満ちています。

ゼミ紹介

将来性の高い先進複合材料を研究

理工学部6回生　宇野純矢 さん

ゼミでは、航空機や自動車、コンクリート構造物などを対象として、構造設計に関わる諸問題の研究を行っています。ここ数年は、自動車の衝突安全、先進複合材料の強度評価、インフラ構造物の維持管理などに力を入れています。

現在、研究室には学部4回生と大学院生合わせて約20人が在籍しています。研究テーマごとに6班に分かれ、班のメンバーと協力しながら研究に取り組んでいます。主な研究テーマは、「振動を検知するセンサを、コンクリートなどの構造物に設置して監視することで、構造物に生じた損傷をリアルタイムに検出するシステムの開発」、「画像処理を行える監視カメラを用いて、コンクリート構造物の表面に生じたひび割れなどの損傷をリアルタイムに検出するシステムの開発」、「次世代航空機、自動車などへの適用が期待される、鉄などの金属材料より軽くて強度があるCFRP（炭素繊維強化プラスチック）材の強度や破壊特性の評価」などが挙げられます。

研究を通じて私は構造設計技術、構造評価技術、信号処理技術に関連した実践的なスキルを習得することに力点をおいています。またスマート構造（人工の構造物に、人間などの生物と同様に知覚・判断・応答の機能を持たせようとする新しい概念）など、将来性のあるテーマにも取り組みます。博士学位の習得も含めて研究開発志向の人に適したゼミといえます。

他の班の進捗状況や研究内容についても理解を深めるため、週1回、教授を含め、研究室の全員が集まって研究経過報告会を行っています。報告会では、質疑応答をしたり、研究の今後の方向性を議論したりと、活発な意見交換が行われます。教授は、研究の経過を見てくれるだけでなく、発表の仕方や研究に対する姿勢など、さまざまな角度から指導してくださるので、研究に関わる専門知識はもちろん、社会人になる上で必要なスキルや物事の考え方も身につけることができます。

Schedule

4回生

前期	研究テーマについて先行研究を調べるなど文献調査
後期	テーマに沿った実験、解析、数値計算、卒業論文作成

プロジェクターで実験データなどを表示しながら研究の進捗を発表する

プレゼンを聞いた日下教授から鋭い指摘が飛ぶ

一緒に研究を進める大学院生から質問を受けることも

Interview

自動車、航空機に使われる先端材料の強度を分析

先進の複合材料の強度や破壊特性を分析し、産業に応用しようとするのが、私のゼミの研究です。近年、これまでにない構造をもった新素材が次々と生み出され、多様な分野で活用されています。私の研究するカーボンファイバーと呼ばれる炭素繊維もその一つです。この複合材料は軽量で強いという特性があり、自動車、航空機、建築構造物など高い安全性が求められる製品への応用が期待されています。

こうした新しい素材を実際に製品に取り入れる前には、強さや壊れやすさを分析して安全性を確かめ、目的にかなう構造に設計しなければなりません。そこで私たちは、カーボンファイバーを自動車や飛行機に用いた場合の強度や衝撃特性、構造について研究しています。たとえば自動車のボディは、ただ堅くて強ければそれでいいというわけではありません。万が一ぶつかった時、衝撃を吸収しながら壊れることで、中にいる人を守るようなものではければならないのです。ゼミでは、カーボンファイバーを自動車に用いた場合の衝撃に対する強度などを測定し、どんな構造設計にするのが最適かを解析しています。その他、飛行機の翼の継ぎ目部分はどう設計すれば壊れにくいかといった研究に取り組んでいる学生もいます。

研究成果が「目に見える」ところがおもしろい

私の研究の出発点は、航空工学に興味をもったことです。そこから飛行機などの輸送機関の構造設計の研究に携わるようになりました。飛行機や自動車など、身近にあって子ども心にも興味をかきたてられるようなものを対象とし、研究成果が「目に見える」ところがこうした機械研究のおもしろさでしょう。企業との共同研究も多く、共同研究した企業に就職を決める学生もいます。

私の目下の研究テーマは、「構造ヘルスモニタリング」。力を加えると電気信号を発信する圧力素子を飛行機や自動車の構造に組み込むことで、定期検査などで人間が調べなくても、機械自身が瞬時に異変を察知し、トラブルや事故を防ぐ。そうした装置の開発につなげる研究を進めています。

「結果」を重視することで成長する

ゼミでは、学生はグループに分かれ、実際に材料を使って強度を測定したり、コンピュータでシミュレーションしたり、実験や解析が中心です。週1回、いくつかのグループが進捗状況をプレゼンテーションし、大学院生も交えて意見を交換します。学生の研究活動ではプロセスも大切ですが、私はあえて「結果」を重視します。最も安全性の高いジョイントを設計できたか、より信頼性の高い実験結果を導き出せたかと、常に学生に成果を問います。結果を求めることで、学生も全力を発揮するし、成長すると思うからです。厳しいこともあるでしょうが、1年間、研究を通して自分で問題を解決する力、求められる結果を収める力を身につけることが、社会に出ても役立つと考えています。

Profile

日下貴之（くさか　たかゆき）

理工学部教授

1989年京都大学工学部航空工学科卒業。1991年同大学院工学研究科航空工学専攻修了。同年トヨタ自動車（株）入社後、1998年兵庫県立工業技術センターを経て1998年より本学へ。工学博士（京都大学）。

Student's Voice

技術者を目指して 研究の仕組みや意識の持ち方を習得

理工学部4回生　伊藤 智 さん

私は現在、圧電素子を用いた大型構造物のヘルスモニタリングシステムの開発に取り組んでおり、数値解析モデルの作成や、評価を中心に研究活動を行っています。この研究では、固体中を伝播する弾性波の解析が重要です。先輩や先生方から指導していただき、学習しながら研究しています。ゼミでは、合理的に研究を進めていくための仕組みや意識の持ち方を先生方が厳しくもていねいに指導してくださるので、無駄のない研究計画を立て、活動することができます。この研究室での活動を通じて将来技術者になるための知識や技術を身につけていきたいと考えています。

Student's Voice

将来多様な分野で活用される 新材料を研究するのがやりがい

理工学部 4回生　村尾拓紀 さん

ゼミを通じて問題発見能力や問題を解決するための考察力の重要性を実感しました。私が取り組んでいる研究テーマは、炭素繊維強化プラスチック（CFRP）を用いた機械的接合部の高強度化です。CFRPに機械的接合を適用すると著しく強度が下がるという問題を解決するべく実験や解析を進めています。CFRPは軽くて強いという特性をもち、繊維の種類や量、方向、繊維を覆う樹脂の種類、成形方法によって最適な強度を設計することができる素晴らしい材料です。将来さまざまな分野で活用されると考えられており、研究もやりがいがあります。

編集後記　研究の進捗報告の日、ゼミ生は日々積み重ねてきた実験・解析の成果をパワーポイントにまとめ、発表する。教授や大学院生から鋭い質問が飛び、ゼミ生が答えに窮する場面もしばしば。「結果」を求める日下教授ならではの緊張感あふれるやり取りが続く。しかし一旦講義を離れれば、和気あいあいとした空気に。熱意あふれる指導と親密なコミュニケーションのいいバランスが、より高度な「結果」に結びついているようだ。

施設紹介
Introduction of Institution

衣笠キャンパス、BKC（びわこ・くさつキャンパス）ともにキャリアオフィスが開いているのは、平日の9時～17時30分。学生相談窓口で、職員の方に個別に相談できる他、パソコンルームや進路・就職ライブラリー（9時～19時30分、土9時～17時）も利用できます。ライブラリーには、数万社におよぶ企業の会社案内パンフレットや採用情報、業界関連書籍、公務員試験に関する資料などが揃っています。その他DVDや新聞・雑誌などを閲覧することもできます。

KINUGASA CAMPUS

キャリアオフィス衣笠

Navigator
竹下由佳さん
（国際関係学部5回生）

窓口のスタッフの方々に
気軽に相談してください！

就職活動をする上での学生の強～い味方が、ココ、キャリアオフィスです。私は窓口相談によく訪れました。

留学を終えて帰ってきた当初は「海外で働ける企業」という切り口からさまざまな業界に目を向けていました。立命館大学の学生のためだけに、学内で数多くの説明会やセミナーが開催されているので、それには積極的に参加しましたね。マスコミ業界に焦点を絞ったのは、今年の1月頃。就職氷河期といわれている上に難関の業界を志望したことで、最初は不安でいっぱいでした。それを解消してくれたのが、キャリアオフィスです。

まず助けられたのが、自分で書いたエントリーシートを窓口で添削してもらえたこと。「企業が求めているのは、こういうことじゃないよ」と、厳しくも的確にアドバイスしてもらったおかげで、エントリーシートの内容もメキメキ変わっていきました。「キャリアオフィスに行っても話すことがないから」と言う友達もいたけれど、そんな風に気後れする必要はありません。職員の皆さんが明るくて、他の人には相談しづらいことでも話せる雰囲気をつくってくださるので、まずは窓口に足を運んでほしいですね。

もちろん進路・就職に関する資料も充実しています。地下の進路・就職ライブラリーには、4万社もの企業情報があるんです。自習スペースもあるので、興味のある企業の資料を読んだり、隣室のパソコンルームで説明会にエントリーすることもできます。ぜひ活用してください。

業界別に説明会やセミナーの情報が掲載された掲示板。目当てのセミナーを逃さないように定期的にチェックして！

企業の採用担当者が来訪し、学生と直接話してマッチングを図る機会があるのも、立命館ならでは。

BIWAKO KUSATSU CAMPUS

キャリアオフィスBKC

Navigator
迫田祥太さん
（理工学部4回生）

JAブースで待っています！
ぜひ相談に来てください！

理系学生にとってもキャリアオフィスはとても頼りになる存在です。たとえば理系特有の採用システムの一つである学校推薦も、キャリアオフィスを通してエントリーします。毎週エントリーシートの提出日が決まっているので、そうした期日や他にどんな企業から推薦依頼が来ているのかといった情報の収集に欠かせません。

窓口相談は、申し込み制です。Webからでも申し込めるけれど、相談する学生が多い時期には1時間以上待たなければならないことも。そんな時は、オフィスの向かいにある進路・就職ライブラリーをチェックすることをお勧めします。各企業に関する資料の他、いわゆる業界本なども豊富に揃っています。また過去の就職ガイダンスで、OBや講師の方が発表する際に使われたプレゼン資料も整理されています。業界の動向や就職活動の実態などを知ることができ、これが結構役に立つんですよ。パソコンルームは、説明会やセミナーへのエントリーの他、会社を紹介したDVDの視聴にも活用できます。

僕は3回生の時、2社でインターンシップを経験してから少しずつ志望を固めていきました。キャリアオフィスには2月下旬から3月中旬にかけてよく足を運びました。この時期にエントリーシートの提出が集中するので、添削してもらったり、面接指導を受けたりしました。

12月中旬からは、キャリアオフィス内に内定を決めた学生による相談ブースもできます。僕もブースに入る予定。身近な学生のリアルな体験談を聞くのも就活に役立つと思いますよ。

卒業生を対象とした既卒者求人を貼り出した掲示板もあります。

就職ガイダンスで使われた発表資料も貴重な情報源です！

保健センター健康通信

保健センターから父母の皆様へ

子宮頸がんが予防できるようになりました

子宮頸がんとは

子宮がんには、子宮の入り口近くにできる子宮頸がんと、子宮の奥の方に発生する子宮体がんがあります。そのうち、子宮頸がんは20歳代後半から増え始め、30歳代にピークとなる、若い女性に多いがんで、年間約8,000人が発症しています（図1）。戦後の不衛生な時代に非常に多かった子宮頸がんは、徐々に減少してきましたが、近年再び増加傾向が見られ、若年化がどんどん進んでいます（図2）。地方自治体での子宮がん検診の対象者も、20歳以上に引き下げられました。

図1　子宮頸がんの罹患率と死亡率（日本人女性）

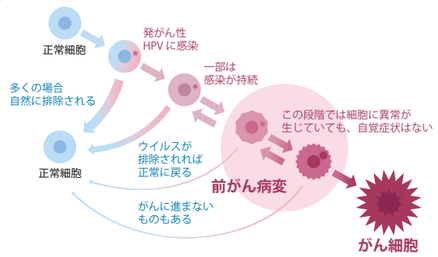
図2　日本における20～29歳の女性10万人当たりの各種がんの発症率推移

子宮頸がんの原因は

子宮頸がんの原因は、HPV（ヒトパピローマウイルス）というウイルスであることがわかっています。HPVには100種類以上ありますが、そのうち約15種類が子宮頸がんの原因となる発がん性HPVといわれています。

HPVは主に性交渉で感染します。10代女性の2人に1人はHPV陽性であったという調査結果もあり、非常にありふれた感染症です。発がん性HPVに一度感染しても、9割以上の人ではウイルスが自然に排除されますが、約1割の人では感染が持続します。感染が持続している人のうち、さらに一部の人にがんが発生します（図3）。性交経験のある女性の約8割が、生涯のうちにこの発がん性HPVに感染すると言われており、だれもが子宮頸がんになる可能性があるのです。

図3　発がん性HPV感染とがん細胞への変化



子宮頸がんを予防する方法は

子宮頸がんの原因であるHPVに対するワクチンが日本でも接種できるようになりました。発がん性HPVのうち16型と18型の二種類の感染を予防することができます。日本人の子宮頸がんの約60%は16型もしくは18型が原因です。特に若い人ほど16型・18型が原因であることが多いといわれており、12歳女性が全員ワクチンを受ければ、73%の子宮頸がんを予防できると予測されています。

性交渉の経験があるとワクチンの効果はないのでしょうか

発がん性HPVに感染しても90%以上は自然に排除されます。また、HPVに感染しても抗体が作られないため、何度でも同じタイプのHPVに感染する可能性があります。ワクチンを接種して抗体を作るしか、新たな感染を予防する方法はありません。したがって、性交渉の経験がある・なしにかかわらず、ワクチンを受ける意義は大きいと言えます。

子宮頸がんワクチンの方法と費用は

子宮頸がんワクチンは筋肉注射で、3回接種する必要があります。初回、初回から1ヵ月後、初回から6ヵ月後の3回です。3回接種することで十分な効果が得られるので、きちんと最後まで接種してください。費用は3回で5万円程度かかります。公費負担（定期予防接種に組み入れる）が検討されていますが、最も効果が上がる（ほとんどが性交渉経験前）と考えられる11歳から14歳ぐらいが対象となる予定です。残念ながら、大学生は自費で接種するしかなさそうです。

他のワクチンとの違いは

子宮頸がんワクチンは、現在すべて輸入ワクチンです。日本製のワクチンには含まれていないアジュバントという免疫反応を強く起こさせる物質が含まれています。そのため、接種時の痛みや接種後の腫れが通常のワクチンよりも強いことが多く、時に筋肉痛や関節痛、頭痛、発疹などの副反応が出現することもあります。接種後1週間は無理をせず、体調に注意する必要があります。

ワクチンを打てば子宮頸がん検診はいらないのでしょうか

ワクチンを接種しても、子宮頸がん検診は必要です。16型・18型の感染はほぼ100%予防できますが、その他の型が原因で子宮頸がんを発症してしまうことがあります。また、接種前にすでに感染してしまっているHPVを排除したり、発症している子宮頸がんの進行を遅らせたり治したりすることはできません。定期的に検診を受けて早期発見し、がんになる前（前がん状態）に治療することが重要です（図4）。にもかかわらず、日本では子宮頸がん検診の受検率はわずか2割余りにすぎません。欧米諸国に比べると、極めて低いのが現状です（図5）。ワクチン接種と子宮頸がん検診をあわせることで、確実に子宮頸がんから体を守ることができるのです。

図4　子宮頸がん検診による早期発見

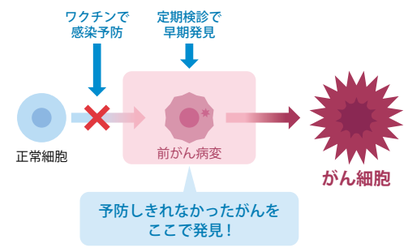
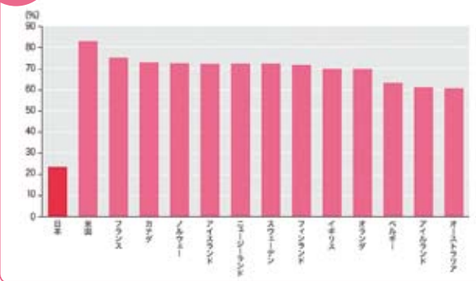


図5　先進国の子宮頸がん検診受診率



子宮頸がんは、ワクチン接種で予防できる唯一のがんです。子宮頸がんを予防するのに、早すぎることはありません。子宮頸がんワクチンの接種と子宮頸がん検診を、是非お嬢様にお勧めください。また、不安や疑問などがあれば、直接お子様に説明いたしますので、保健センターへご相談くださいますようお伝えください。

詳しくは、下記の保健センターのホームページをご覧ください。

立命館保健センター
http://www.ritsumei.ac.jp/mng/gl/hoken/
立命館大学ホームページ → 各センター等 → 保健センター

図の引用元：グラクソ・スミスクライン株式会社

SPORTS スポーツ

[問い合わせ先]
スポーツ強化センター：075-465-7863

アメリカンフットボール部

アメリカンフットボール学生日本一！「パナソニック電工杯第65回毎日甲子園ボウル」パンサーズが2年ぶり7度目の優勝！

（12月19日　阪神甲子園球場）

アメリカンフットボールの学生日本一を決める「パナソニック電工杯第65回毎日甲子園ボウル」が開催され、2年ぶり7回目の学生日本一を狙う立命館大学アメリカンフットボール部パンサーズは、初の学生王者を狙う早稲田大学ビッグベアーズと対戦した。攻守両面でバランスの取れた動きを見せ、終始試合を支配した立命館大学が48対21で早稲田大学に勝利し、2年ぶり7度目の学生日本一を手にした。

甲子園ボウルで勝利し、喜ぶパンサーズの選手たち

（1月3日　東京ドーム）

2011年1月3日にはアメリカンフットボールの日本一を決定する第64回ライスボウルが開催された。

立命館大学アメリカンフットボール部パンサーズは社会人代表のオービックシーガルズに学生代表として挑んだ。しかし、オービックの堅守の前に得点が奪えず、24対0で敗れ、2年ぶりの日本一奪還は惜しくも果たせなかった。

水泳部

シンクロ乾&小林ペア 銀メダルを獲得

（11月20日　中国・広州）

第16回アジア競技大会が開催され、シンクロナイズドスイミングのデュエットで、乾友紀子さん（経営2）、小林千紗さん（校友・2010年経済卒）組が中国に次ぐ銀メダルに輝いた。

また、チームとコンビネーションでも乾さん、小林さん、上南侑生さん（経済3）が出場し、銀メダルを獲得。この結果、日本はシンクロナイズドスイミング競技全種目でメダルを得た。

カヌー部

渡邊大規さんが銅メダルを獲得！

（11月25日　中国広東国際ボートセンター）

第16回アジア競技大会男子カヤックペア1000mにおいて、渡邊大規さん（経営4）・水本圭治さん（大正大学）ペアが、銅メダルを獲得した。

柔道部

大野陽子さんが第26回全日本学生柔道体重別選手権大会で柔道部初の優勝

（10月9・10日　東京・日本武道館）

全日本学生柔道体重別選手権大会は、各地区の予選を勝ち抜いた学生が体重別にて各階級の日本一を競う大会。

女子70kg級に出場した大野陽子さん（産社3）が見事優勝を飾った。本大会において立命館大学の選手では初優勝の快挙となった。

バドミントン部

第61回全日本学生バドミントン選手権大会で初の団体準優勝

（10月16日～21日　東京体育館）

全日本学生バドミントン選手権大会が開催され、立命館大学バドミントン部女子が団体戦で決勝に進出、初の準優勝を果たした。

女子陸上競技部

第28回全日本大学女子駅伝準優勝 立命館新記録を樹立

（10月24日　仙台市）

第28回全日本大学女子駅伝対抗選手権大会において、立命館大学は立命館新記録を樹立する走りを見せたが、惜しくも前年と同じ2位でゴールし、準優勝となった。

国際千葉駅伝に竹中理沙さん、田中華絵さんが出場 日本学生選抜初優勝に貢献

（11月23日　千葉市）

国際千葉駅伝2010において日本学生選抜が初優勝した。

日本学生選抜として立命館大学から竹中理沙さん（経営3）と田中華絵さん（経済3）が出場。2区を走った竹中さんが区間2位と好走、6区の田中さんは日本代表チームとの激しいアンカー対決を制し、優勝に貢献した。

剣道部

剣道部男子 55年ぶり2度目の3位入賞

（10月31日　大阪府立体育館）

剣道部男子が全日本学生剣道優勝大会において団体戦で55年ぶり2度目の3位入賞に輝いた。

弓道部

弓道部男子 3年ぶり2度目の優勝

（11月21・22日　伊勢神宮弓道場）

第58回全日本学生弓道王座決定戦が開催され、弓道部男子が3年ぶり2度目の優勝を飾った。

サッカー部

第88回関西学生サッカーリーグ 3位でインカレ出場へ

（11月28日　長居第2陸上競技場）

関西学生サッカー後期リーグ最終節の試合が行われ、立命館大学は近畿大学に2－0で快勝した。この勝利でリーグ戦3位となり、2年連続10回目の全日本大学サッカー選手権大会（全日本インカレ）出場を決めた。

CULTURE/ART 文化・芸術

[問い合わせ先]
学生オフィス：075-465-8167

応援団吹奏楽部

応援団吹奏楽部が銀賞を獲得

（10月23日　愛媛県県民文化会館（ひめぎんホール））

第58回全日本吹奏楽コンクール大学の部が開催され、応援団吹奏楽部が銀賞（2年連続・通算5回目）を獲得した。

R.D.C.

R.D.C（立命館ダンスサークル）草津市常盤小学校3年生を迎え交流活動

（10月27日　びわこ・くさつキャンパス）

R.D.C.（立命館ダンスサークル）の学生が草津市立常盤小学校3年生の児童37名を迎え、「ダンス体験」の交流活動を行った。

児童たちは、学生たちの丁寧な指導のもと、ダンスの基本的な動きを体験。流れる音楽を良く聞いてリズムを取りながら練習を繰り返すことで、交流が終わる頃には、一連の動作をつなげて踊れるようになった。

CAMPUS ACTIVITIES 学生活動

[問い合わせ先]
学生オフィス：075-465-8167

学生のエネルギーが爆発！2010年度立命館大学学園祭を開催

11月6日（土）、7日（日）の2日間、びわこ・くさつキャンパス（BKC）にて、11月13日（土）、14日（日）、衣笠キャンパスにて2010年度立命館大学学園祭を開催した。

今年の学園祭のテーマは「110℃」。個々の学生のエネルギーを集約させた強い力の爆発性と、そこから生まれる融和や変化を表し、また立命館学園創立110周年に合わせてより広く立命館に関わる人への認知やアイデンティティの定着を目指す意味合いがテーマに込められている。

両キャンパスともに多くの模擬店やフリーマーケットが立ち並び、来場者は思い思いの形で学園祭を楽しんでいた。模擬店ではエコ活動として毎年恒例のリユース食器導入に加え、ゴミを細かく分類する取り組みを実施し、環境への配慮を心掛けた。

学園トピックス

学園の取り組み

立命館新総長に川口清史教授を再選

学校法人立命館は、現・川口清史総長の任期が、2010年12月末日をもって満了となることに伴い、総長選挙を実施し、次期総長に川口現総長を再選いたしました。任期は2011年1月1日より4年間となります。

立命館大学新キャンパスを大阪府茨木市に開設

立命館学園では、2020年までを視野に入れた将来構想づくりを進めています。その目標である教育・研究の質向上を促進するキャンパス環境を実現するために、大阪府茨木市に新キャンパスを開設することを決定しました。新キャンパス開設を契機に学生の学びと成長にふさわしい、ゆとりある空間の確保、施設設備の充実を、衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパスを含むすべてのキャンパスで進めていきます。

握手する野村宣一・茨木市長と
川口清史・立命館総長

インド・ニューデリーに「立命館インドオフィス」を開設

立命館大学は、11月15日（月）、インド・ニューデリーに立命館インドオフィスを開設いたしました。

このオフィスは、文部科学省の国際化拠点整備事業（グローバル30）における「海外大学共同利用事務所」に指定されており、採択校がインドにおいて行う広報活動の支援や説明会の開催、テレビ会議システムを使用した入学審査時の面接実施などに利用される予定です。

また、立命館大学の現地の学校への広報活動やネットワークの形成も行っていきます。

映像研究科が設置認可を受けました

2011年4月に開設を予定している映像研究科が文部科学省より設置認可を受けました。

映像研究科は、立命館大学が総合大学であることのメリットを活かした幅広い教養と、映像の制作（作品制作にとどまらず、開発・活用を含む）に関連する技能・技術・分析法の修得により、こうした能力養成を目指します。

研究科概要
学位名称：修士（映像）
定　　員：入学定員10名（収容定員20名）
設置場所：衣笠キャンパス

2012年度に文学部が変わります

文学部は2012年度、新たに「学域」を設けた学部（カリキュラム）改革を実施します。

「学域」とは、複数の専攻を束ねて構成する（※）新たな初年次教育の枠組みで、2回生以降に所属する「専攻」で高度な学問を学ぶための準備を丁寧に行う場として設計されています。これまで「専攻」ごとに設定していた入試の募集人数もこの「学域」単位で設定することになり、ここでの初年次教育を通じて2回生以降に所属する「専攻」を決定します。

※ただし、心理学専攻だけは単独で学域を構成します。

教育・研究の成果

レアメタルを用いないクロスカップリング反応による導電性ポリマーを開発 ―産学連携体制を確立 2011年度実用化予定―

今年のノーベル化学賞に決まった「クロスカップリング反応」を希少金属（レアメタル）のパラジウムではなく、ヨウ素反応剤を使って実現する技術を北泰行・薬学部教授の研究グループらが開発しました。

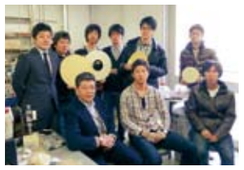
希少金属のパラジウムは入手に制約がありますが、日本での生産量が世界で2番目に多いヨウ素を使えば、製造コストの大幅な削減が見込まれます。

本方法では従来の方法では難しかった炭素の代わりに窒素や硫黄を含む複素環化合物同士のクロスカップリングも可能となるため、種々の有用な導電性ポリマーの新素材として今後が期待されます。

希少金属・セリウムのガラス研磨における使用量低減技術を開発

谷 泰弘・理工学部教授の研究グループが、ガラス研磨において研磨パッド材質に新たにエポキシ樹脂を適用する技術を開発しました。これによって、従来研磨の2倍を超える驚くべき研磨能率が達成されるのみならず、ガラスの鏡面研磨材として使用されている希少金属セリウムの使用量を、低減させることができます。

今回の成果により研磨コストの大幅な低減につながることが期待されます。



三原久明・生命科学部准教授が「平成22年度日本生化学会奨励賞」を受賞

2010年10月27日（水）、三原久明・生命科学部准教授が「平成22年度日本生化学会奨励賞」を受賞しました。この賞は、若手研究者を対象として、生化学の進歩に寄与する顕著な研究を発表し、なお将来の発展を期待しうるもの5名以内に贈られる賞です。三原准教授は、本研究分野のその後の世界的な発展の礎となっている点で高い評価を受けており、今後の更なる活躍が期待されます。

学生の活躍

学生団体「Innovison」がビジネスプランコンテスト「Global Tic 2010」のテクノロジー部門で初優勝！

11月14日（日）から17日（水）まで、台湾で行われたビジネスプランコンテスト「Global Tic 2010」にて、起業家を目指す学生団体「Innovison」が、テクノロジー部門で初優勝を果たしました。

この大会は、台湾最大規模のビジネスプランコンテストの1つで、世界中で起業に関心のある学生やアントレプレナー教育を受講する学生が参加し、ビジネスプランを競う大会。2010年度も各国・地域での予選を勝ち抜いた15の代表チームが出場。参加者の9割以上が学生で、日本代表として立命館大学、慶應義塾大学から各1チームが参加しました。

今回「Innovison」のメンバーが提案したのは、インターネット上でデジタル名刺を管理するビジネスプランで、斬新なアイデアと実用的な点が評価され優勝を掴みました。

地域活性化ボランティア「時代祭応援プロジェクト」受講生が時代祭に参加

10月22日（金）、京都市内にて行われた「時代祭」に、地域活性化ボランティア「時代祭応援プロジェクト（※）」の受講生が参加しました。

受講生は衣装の管理や鼓笛練習の受付、また、時代祭への関心を高めるためのワークショップや展示会を開催するなど、祭事を支える裏方として活動を行ってきました。

当日は、受講生17名と教職員2名が行列に参加。受講生は維新勤王隊の隊士とともに都大路を練り歩きました。

※地域活性化ボランティア「時代祭応援プロジェクト」は、立命館大学サービスラーニングセンターと平安神宮、平安講社第八社が協力して行っているサービスラーニング科目の1つ。

2010年度各種難関試験合格者

司法試験	新司法試験47名・旧司法試験3名
公認会計士試験	29名
国家公務員Ⅰ種採用試験	13名
国家公務員Ⅱ種採用試験	138名
家庭裁判所調査官補1種採用試験	1名
弁理士試験	9名

卒業式のご案内

びわこ・くさつキャンパス　2011年3月21日［月・祝］

第1回　［時間］午前10時～　［対象学部］理工学部、情報理工学部
［場所］BKCジム　［父母会場］プリズムホール

第2回　［時間］午後1時～　［対象学部］経済学部、経営学部
［場所］BKCジム　［父母会場］プリズムホール

衣笠キャンパス　2011年3月22日［火］

第1回　［時間］午前10時～　［対象学部］文学部、国際関係学部、政策科学部、映像学部
［場所］第1体育館　［父母会場］以学館1号ホールおよび2号ホール

第2回　［時間］午後1時～　［対象学部］法学部、産業社会学部
［場所］第1体育館　［父母会場］以学館1号ホールおよび2号ホール

＊卒業合否発表は、2011年3月9日（水）午前10時、各学部掲示板およびホームページに掲出されます。
＊卒業式・学位授与式にご出席の方で、手話通訳が必要な場合は、お早めに各学部事務室へご連絡下さい。

立命館アカデメイア@大阪 移転および名称変更のご案内

立命館アカデメイア@大阪は、2011年1月より梅田に移転し、「大阪キャンパス」と名称変更いたします。大阪の中心地・梅田の駅前エリアに位置し、JR・阪急・阪神と地下鉄各駅が徒歩圏内の好立地です。就職活動の拠点、教育・研究活動の場として、これまで以上に多くの方にご活用いただけるキャンパスを目指してまいります。

新住所：〒530-0018 大阪市北区小松原町2-4 大阪富国生命ビル5階
TEL 06-6360-4895 / FAX 06-6360-4894

- 就職活動支援
- 社会人大学院
- 社会人向け公開講座
- 父母・校友支援
- 入試広報
- 教室等施設利用

立命館プラザ福岡リニューアルオープン

2010年10月より、天神・イムズ8階にリニューアルオープン土・日曜日も利用可能でますます便利になりました。大学や入試に関するパンフレットが充実、相談もできます。

開室時間 → 水曜～日曜 11：00～19：00（月・火・イムズ休館日は閉室）

地下鉄天神駅から
徒歩3分

西鉄福岡（天神）駅から
徒歩3分

新住所：〒810-0001 福岡市中央区天神1-7-11 イムズ8F
TEL 092-738-1201

詳しくは受験生のための入試情報サイト『リッツネット』をご覧ください。
http://ritsnet.ritsumei.jp

卒業生父母の会 入会のご案内

当会は「卒業生父母の会」と称し、お子さまのご卒業後も情報提供をご希望される会員の皆様へ「父母教育後援会だより」と「アカデミック京都ウオッチングのご案内」の送付を継続しています。ご希望の方は、右記の通りご入会手続きをお願い申し上げます。

■情報提供の内容

①父母教育後援会会報の送付（年2回）
②「アカデミック京都ウオッチング」企画案内の送付
※卒業生父母の会にご入会の方のみアカデミック京都ウオッチングにご参加いただけます。

■入会方法

年会費2,000円を下記口座（ゆうちょ銀行）へお振込ください。

■入金受付開始日　2011年4月1日～

口座番号：00980-1-12500
加入者名：立命館大学父母教育後援会
振込金額：2,000円（年会費）
通信欄：「お子さまの氏名／フリガナ」「学部・学科・専攻名」
「学生証番号（不明な場合は卒業年度をご記入ください）」
依頼人欄：住所・氏名・電話番号

＊郵便局に備え付けの振込用紙にてお振込みください。
＊大変恐れ入りますが、振込手数料は各自でご負担をお願いいたします。

◆卒業後の父母の皆様の住所情報について

卒業後も、学園から情報提供をさせていただく場合がございます。つきましては引き続き、住所情報を活用させて頂きますことご了承の程お願いいたします。なお、住所情報の提供に同意いただけない場合は、恐れ入りますが、下記まで、ご連絡賜りますようお願いいたします。

連絡先　立命館大学社会連携部　075-813-8110（担当 大前）

会員様の住所変更について

本誌は、登録されている学生の保証人住所に送付しております。住所を変更された場合は、学生本人による住所変更の手続きが必要です。お子様に学生証をお持ちの上、所属の学部事務室（BKCは学びステーション）まで届け出ていただきますようお伝えください。

立命館大学父母教育後援会だより 2010年度 冬号

2011年2月発行　立命館大学父母教育後援会　〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1　Tel. 075-813-8261　Fax. 075-813-8262